

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第227集

浦和市

白 鍬 宮 腰 遺 跡

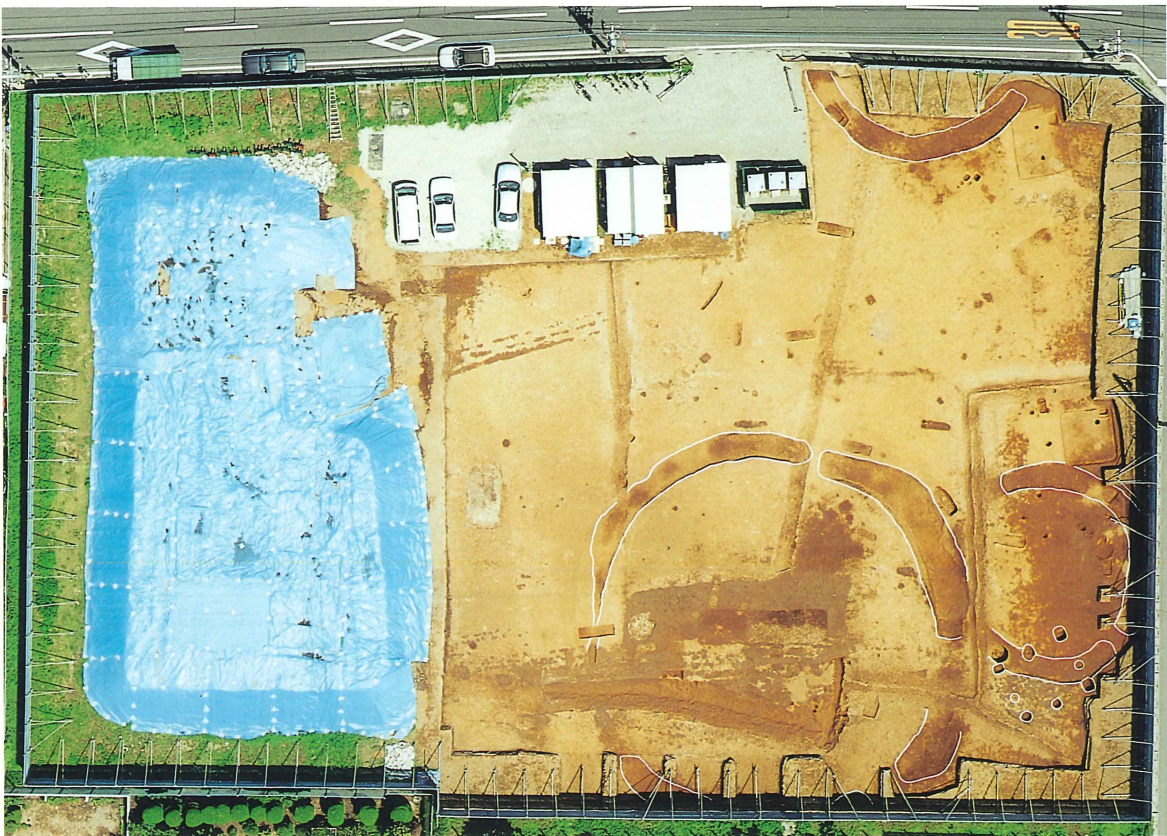
県営浦和白鍬団地建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

1 9 9 8

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



調査範囲北半



調査範囲南半



第 2 号古墳跡出土土器



第 4 号古墳跡出土土器

序

埼玉県では、21世紀の豊かな彩の国をめざして、快適でうるおいのある生活空間を形成するため、地域の特性を生かした多彩なまちづくりに努めています。

都市化が進む浦和市・大宮市を中心とした県南地域では、首都機能を含めた高次都市機能の集積を図り、周囲の自然環境を保全し交通網を整備するとともに、全国的・国際的な都市活動の拠点となるよう整備を進めております。

このたび、都市機能を充実させ、過密問題を解消し、安全で質の高い都市空間を再構築するため、県営浦和白鍬団地が建設されることになりました。

県営浦和白鍬団地建設予定地内には、埋蔵文化財が所在することが知られていました。その取扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受けて、発掘調査を実施いたしました。

浦和市内に広がる低地は、ときに氾濫による大きな被害を被ることもありましたが、荒川のもたらす水と肥沃な土壌に生まれ、古代より発展してまいりました。近年では、見沼田圃をはじめ、人と自然の共生する優れた環境が残されていることで知られるようになりました。

荒川低地に面した台地には、水田地帯を背景に多くの遺跡が残されております。本書で報告いたします白

鍬宮腰遺跡も、荒川低地をのぞむ台地上に立地する遺跡のひとつです。

白鍬宮腰遺跡は、著名な白鍬古墳群を含み、今回の調査でも古墳時代後期の古墳跡が見つかっています。また、古墳時代前期の住居跡や中・近世の溝跡などが発見されました。さらに、縄文時代中期の炉跡や包含層から多数の土器が出土しており、弥生時代以後の遺跡が多い当地域において、貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまでご協力いただきました埼玉県住宅都市部住宅建設課、浦和市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成10年12月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県浦和市に所在する白鍬宮腰遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

白鍬宮腰遺跡（SRKW）
浦和市大字白鍬字仲道395番地1他
平成8年6月21日付け教文第2-15号
3. 発掘調査は、県営浦和白鍬団地建設事業にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、鈴木秀雄、新屋雅明が担当し、平成8年4月1日から平成8年9月30日まで実施した。整理報告書作成事業は岩田明広³が担当し、平成10年7月1日から平成10年9月30日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量および航空写真測量は株式会社シン技術コンサルに、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に、それぞれ委託した。
6. 発掘調査における写真撮影は鈴木・新屋³が行い、遺物写真撮影は岩田³が行った。
7. 出土品の整理および図版の作成は、旧石器時代の遺物については西井幸雄³、縄文時代の遺物については新屋³、その他は岩田³が行った。本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課³、IV-1・V-1を新屋³、他は岩田³が行った。
8. 本書の編集は、岩田³があたった。
9. 本書にかかる資料は平成10年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センター³が保管する。
10. 本書の作成にあたり、浦和市教育委員会、浦和市遺跡調査会、および青木義脩、小倉均、高山清司の諸氏からは御教示・御協力を賜った。記して謝意を表するものである。

凡例

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第IX系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 遺構の表記記号は次のとおりである。
S J…住居跡 S B…掘立柱建物跡
S S…古墳跡 S D…溝跡 S K…土壙
4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。
遺構全測図1/200
住居跡・掘立柱建物跡1/60
古墳跡1/160 土壙1/60
断面図1/60
5. 挿図中のスクリーントーンは、以下の各事項を表すが、例外については、その都度示した。また、遺物図における網かけは赤彩部位を示す。
6. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外についてはスケールを示した。
土器1/4 土製品・金属製品1/2
石製品・石器2/3 土器拓影1/3
7. 遺物観察表の計測値は、()内が推定値、単位はcmおよびgである。
8. 遺物観察表における遺物の色調は、新版標準土色帳（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に準じた。
9. 遺物観察表の胎土は、含有碎屑物のうち礫・砂粒鉱物等を肉眼観察し、下のように表記した。
A…透明・半透明鉱物 B…白雲母
C…黒雲母 D…輝石・角閃石
E…白色針状物質 F…石英質礫
G…その他の砂 H…赤色粒子
10. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。
A…良 B…不良



地山



焼土



炭化物



貼床

目次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	(3) 埋葬施設跡	61
1. 調査に至るまでの経過	1	3. 奈良・平安時代	63
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	(1) 土壙	35
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	(2) 溝跡	35
II 遺跡の立地と環境	4	(3) その他の出土遺物	35
III 遺跡の概要	9	4. 中・近世	65
IV 遺構と遺物	15	(1) 溝跡	65
1. 旧石器時代・縄文時代	15	5. その他	71
(1) 住居跡	15	(1) 土壙	71
(2) 包含層	18	(2) ピット	77
(3) グリッド出土土器	27	(3) グリッド出土遺物	79
(4) 旧石器時代および縄文時代の石器	31	V 調査の成果	81
2. 古墳時代	33	1. 縄文時代中期の土器について	81
(1) 竪穴住居跡	33	2. 白鍬古墳群の成立をめぐって	82
(2) 古墳跡	46	引用・参考文献	91

挿 図 目 次

第1図	埼玉県地形	4	第27図	第8号竪穴住居跡	44
第2図	周辺の遺跡	6	第28図	第8号竪穴住居跡出土遺物	45
第3図	白鍬宮腰遺跡遺構分布と周辺の地形	11	第29図	第1号古墳跡(1)	47
第4図	調査範囲全測図	12	第30図	第1号古墳跡(2)	48
第5図	基本土層	13	第31図	第2号古墳跡	50
第6図	第9号住居跡	16	第32図	第2号古墳跡出土遺物	51
第7図	第9号住居跡出土遺物	17	第33図	第3号古墳跡および出土遺物	51
第8図	縄文時代包含層遺物分布図	19	第34図	第4号古墳跡	53
第9図	縄文時代包含層遺物出土状況(1)	20	第35図	第4号古墳跡遺物出土状況	54
第10図	縄文時代包含層遺物出土状況(2)	21	第36図	第4号古墳跡出土遺物	55
第11図	縄文時代包含層出土遺物(1)	24	第37図	第5号古墳跡および出土遺物	57
第12図	縄文時代包含層出土遺物(2)	25	第38図	第6号古墳跡および出土遺物	59
第13図	縄文時代包含層出土遺物(3)	26	第39図	第7号古墳跡	60
第14図	縄文時代包含層出土遺物(4)	27	第40図	埋葬施設跡および出土遺物	61
第15図	縄文時代グリッド出土遺物(1)	29	第41図	第1号掘立柱建物跡	63
第16図	縄文時代グリッド出土遺物(2)	30	第42図	第1号溝跡	66
第17図	旧石器時代および縄文時代の石器	32	第43図	第2・3号溝跡	67
第18図	第1号竪穴住居跡	34	第44図	第4・5号溝跡	69
第19図	第1号竪穴住居跡出土遺物	35	第45図	溝跡出土遺物	70
第20図	第2号竪穴住居跡	36	第46図	土壙(1)	74
第21図	第3号竪穴住居跡および出土遺物	37	第47図	土壙(2)	75
第22図	第4号竪穴住居跡	38	第48図	土壙出土遺物	76
第23図	第5号竪穴住居跡	39	第49図	ピットおよび出土遺物	78
第24図	第6号竪穴住居跡	41	第50図	グリッド出土遺物	79
第25図	第6号竪穴住居跡出土遺物	42	第51図	白鍬宮腰遺跡周辺の土師器杯の変遷	87
第26図	第7号竪穴住居跡および出土遺物	43	第52図	古墳の変遷	88

図版目次

- 図版1 調査範囲北半
調査範囲南半
- 図版2 調査範囲全景(合成写真)
- 図版3 第9号住居跡炉跡
第9号住居跡炉体土器
- 図版4 第9号住居跡炉体土器断面
作業風景
- 図版5 第1号竪穴住居跡
第1号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版6 第1号竪穴住居跡炉跡
第1号竪穴住居跡貯蔵穴炭化材出土状況
- 図版7 第1号竪穴住居跡貯蔵穴
第2号竪穴住居跡
- 図版8 第2号竪穴住居跡炉跡
第3号竪穴住居跡
- 図版9 第4号竪穴住居跡
第4号竪穴住居跡炉跡
- 図版10 第5号竪穴住居跡
第5号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版11 第6号竪穴住居跡
第6号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版12 第6号竪穴住居跡遺物出土状況
第6号竪穴住居跡埋没状況
- 図版13 第7号竪穴住居跡
第7号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版14 第7号竪穴住居跡遺物出土状況
第7号竪穴住居跡掘り方
- 図版15 第8号竪穴住居跡
第8号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版16 第8号竪穴住居跡遺物出土状況
第8号竪穴住居跡遺物出土状況
- 図版17 第1号古墳跡
第2号古墳跡
- 図版18 第2号古墳跡遺物出土状況
第2号古墳跡遺物出土状況
- 図版19 第3号古墳跡
第4号古墳跡
- 図版20 第4号古墳跡
第4号古墳跡遺物出土状況
- 図版21 第4号古墳跡遺物出土状況
第4号古墳跡遺物出土状況
- 図版22 第4号古墳跡遺物出土状況
第4号古墳跡遺物出土状況
- 図版23 第4号古墳跡遺物出土状況
第4号古墳跡勾玉出土状況
- 図版24 第4号古墳跡と第6号古墳跡
第5号古墳跡
- 図版25 第6号古墳跡
第6号古墳跡遺物出土状況
- 図版26 第6号古墳跡遺物出土状況
第7号古墳跡
- 図版27 第1号掘立柱建物跡
第1号溝跡(西から)
- 図版28 第1号溝跡(北から)
第2号溝跡
- 図版29 第3号溝跡
第4号溝跡
- 図版30 第1号埋葬施設跡
第1号埋葬施設跡
第2号埋葬施設跡
- 図版31 第2号埋葬施設跡
第2号埋葬施設跡粘土残存状況
第2号埋葬施設跡遺物出土状況
- 図版32 第1号土壙
第4号土壙
第5号土壙
第13号土壙
第14号土壙
第16号土壙
第17号土壙

	第19号土壙		第28図 7
	第21号土壙		第49図P 1-2
	第22号土壙		第49図P 2-1
図版33	第7図 1	図版41	第30図 1
	第7図 3		第32図 1
	第7図 5		第32図 2
	第11図 3		第32図 3
	第11図 6		第32図 4
	第11図 7		第32図 5
	第11図 8	図版42	第36図 1
図版34	第11図 1		第36図 2
	第11図 2		第36図 3
	第11図 4		第36図 4
	第11図 5	図版43	第36図 5
	包含層出土縄文土器(1)第12図		第36図 6
図版35	包含層出土縄文土器(2)第12図		第36図 7
	包含層出土縄文土器(3)第12・13図		第37図 1
図版36	包含層出土縄文土器(4)第13図		第37図 2
	包含層出土縄文土器(5)第14図		第38図 1
図版37	グリッド出土縄文土器(1)第15図	図版44	第50図 8
	グリッド出土縄文土器(2)第15図		第50図 9
図版38	グリッド出土縄文土器(3)第16図		第50図12
	グリッド出土縄文土器(4)第16図		第50図13
図版39	第19図 7		第50図19
	第19図 4		第50図20
	第25図 1		第50図23
	第25図 3	図版45	溝跡出土遺物
	第25図 4		鉄製品
	第26図 1		玉類
図版40	第26図 2	図版46	出土石器(1)
	第28図 5		出土石器(2)
	第28図 6		

I 発掘調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では、「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しい国づくり」を基本理念とし、さまざまな施策を展開しているところである。豊かな彩の国づくりに向けた施策の中で、「快適でうるおいのある生活空間の形成」として、「質の高い住まいづくりと住環境の整備」を積極的に進めている。とくに、多様化する県民の住宅需要に応じて、すべての県民が安全で快適な住生活を営むことができるよう、計画的な住宅供給の促進を図っている。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成8年1月8日付け住建第1207号で、住宅建設課長より、県営住宅（浦和白鍬団地）建設予定地における埋蔵文化財等の所在の有無及びその取り扱いについての照会を受けた。文化財保護課では、平成8年1月30日付け教文第1146号で、次のように住宅建設課長あてに回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
白鍬宮腰遺跡 (No.01-230)	集落跡	古墳	浦和市大字 白鍬宮腰他

2 取り扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存するのが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状変更する場合は、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査をしてください。

その後、住宅建設課と文化財保護課の間で取り扱いについて協議を行ったが、計画変更による現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。発掘調査の実施機関である(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団を含めて、工事日程や調査計画等についての協議を行い、平成8年4月1日から9月30日までの期間で、発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係る通知は平成8年6月21日付け教文第2-15号で行っている。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

白楯宮腰遺跡の調査は、平成8年4月1日から平成8年9月30日まで行った。調査面積は約4,000㎡である。

白楯宮腰遺跡における発掘調査の実施経過は以下のとおりである。

4月上旬～中旬、調査対象地周辺の家屋調査に関する住民との打ち合わせ、業者の選定を行い、4月19日～29日まで家屋調査を実施した。

4月下旬から5月初旬、現場事務所設置部分の試掘調査を行い、遺構が認められなかった部分に事務所を設置した。同時に、周辺住宅への砂泥飛散防止のため、防塵ネットを設置した。

5月上旬、住宅建設課と調査方法・日程等について打ち合わせを行った。

5月中旬、廃土が場内処理となったため、調査対象地域の南側部分から表土掘削および遺構確認を開始した。検出した遺構から調査を行った。

5月23日、基準点測定を行った。

5月下旬、当初、防塵ネット基礎部分となっていた個所に遺構が存在していることがわかったため、調査範囲を拡張した。

6月～7月上旬、検出した遺構について、順次、精査、測量、写真撮影等を行い、7月中旬をもって南側調査区の調査を終了した。終了にともない、7月12日、航空写真撮影を行った。なお、7月1日、大久保

小學校生徒による遺跡見学があった。

7月17日、北側調査区の重機による掘削を開始し、7月中をもって掘削を終了した。

8月、確認した遺構について、順次、精査・測量等を行った。また、防塵ネット基礎部分についても、南側同様、拡張を行った。

9月上旬 遺構の測量・写真撮影等を終了し、10日、航空写真撮影を実施した。9月中旬、縄文時代関係の調査を行った。並行して、調査終了部分から重機による埋め戻しを行った。9月18日、包含層の調査を終了した。9月中旬、重機による埋め戻しを終了した。同時に、現場事務所の撤去・器材搬出を行った。

9月28日より、調査後の家屋調査を行い、9月末をもって、白楯宮腰遺跡に関するすべての調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理事業は、平成10年7月1日から平成10年9月30日まで実施した。

7月当初から、遺物の接合・復元・実測を行った。

8月、遺物の実測と平行して、遺構図面の整理、遺物写真撮影を行った。

9月上旬、遺構・遺物図面のトレース、および遺構図・遺物図の版組を行い、9月末まで、割付・原稿執筆を行った。10月以後、入札・校正を経て、12月末に本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成8年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事 兼 管理部長	稲葉 文夫
理事兼調査部長 管理部長	小川 良祐
庶務課長	依田 透
主査	西沢 信行
主任	長滝 美智子
主事	菊池 久
専門調査員 兼 経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二
調査部	
調査部副部長	高橋 一夫
調査第一課長	坂野 和信
主査	鈴木 秀雄
主任調査員	新屋 雅明

(2) 整理・報告書刊行 (平成10年度)

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事 兼 管理部長	鈴木 進
管理部長	
庶務課長	金子 隆
主査	田中 裕二
主任	長滝 美智子
主任	腰塚 雄二
専門調査員 兼 経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	菊池 久
資料部	
資料部長	増田 逸朗
主幹 兼 資料部副部長	小久保 徹
資料整理第二課長	市川 修
主任調査員	岩田 明広

II 遺跡の立地と環境

埼玉県の地形は、西部を占める上武・奥秩父・外秩父の各山地と、県土の中心部を南北に連なる丘陵・台地、利根川・中川・荒川によって形成された北部から東部に広がる低地帯の3つに分けられる。

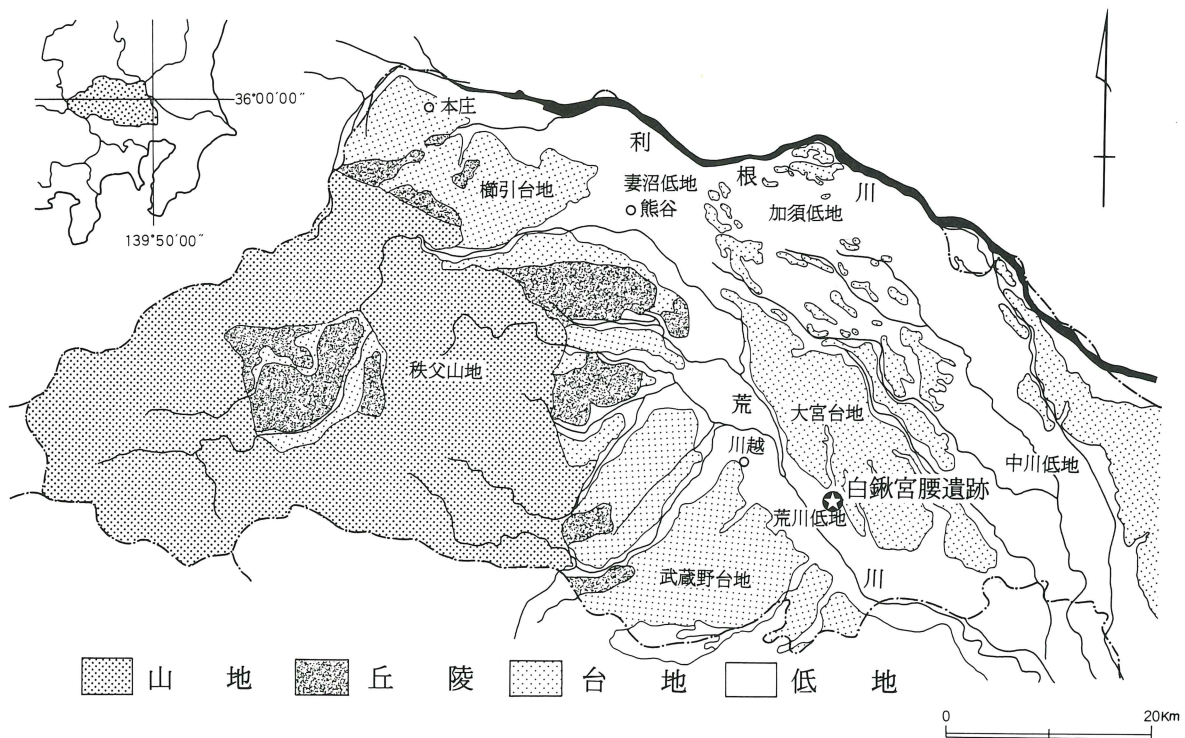
丘陵・台地、低地については、関東平野の一部をなすもので、埼玉平野とよばれている。低地は県北東部の利根川中流低地と、県南東部の東部低地からなる。東部低地は、中央に孤立する大宮・安行・蓮田・白岡・慈恩寺の各台地からなる台地群をはさんで、東が中川低地、西が荒川低地とよばれている。

白鍬宮腰遺跡が所在する浦和市は、東部に大宮台地が、西部に荒川低地が展開している。大宮台地は、主に更新世のうち武蔵野期に形成された台地で、鴨川・芝川などによる開析がすすみ、樹枝状の谷が発達している。荒川低地は、縄文海進時の海成層を主体とした沖積低地で、度重なる荒川の氾濫によって形成された自然堤防・後背湿地等の微地形が発達している。

白鍬宮腰遺跡は鴨川左岸に位置し、大宮台地西縁の日進与野支台が荒川の氾濫による侵食と堆積、鴨川による開析を受けた微高地に立地する。周辺地域は樹枝状に入り組む台地のほか、多数の自然堤防と後背湿地が発達し、それぞれの立地条件の下に遺跡が多く分布している。

当地域にはじめて人跡が標されるのは、低地・侵食谷に面した大宮台地周縁部である。現在までのところ、ナイフ形石器・彫器等を出土した明花向遺跡A区が旧石器時代でも最古の例としてよい(田中他1984)。明花向遺跡のある芝川流域には、該期の著名な遺跡が集中している。ナイフ形石器を出土した松木遺跡(第1~3・5~7・9・11・12次)・馬場北遺跡、尖頭器をとともうとされる大古里遺跡等で石器集中が見出された。また明花向遺跡C区では細石刃が検出された(田中他1984)。一方、台地西部の鴨川流域には、ナイフ形石器・尖頭器を出土した原遺跡(立木他1985)・間ノ谷

第1図 埼玉県の地形



遺跡等が分布している。当地域は、200箇所以上という旧石器時代の遺跡分布（田中他1984）を誇る大宮台地でも、もっとも遺跡密度の濃い地域である。

遺跡の立地傾向は、縄文時代に入ると台地上に広く展開する。草創期については、隆起線文・爪形文・多縄文系土器を出土したえんぎ山遺跡、石槍を出土した山久保遺跡が管見に触れる程度であるが、早期以後、遺跡数は増加する。

早期の遺跡では、沈線文土器・押型文土器を出土した北宿西遺跡（中村他1989）・白幡中学校校庭遺跡（青木他1977）、捺糸文系土器を出土した明花向遺跡（田中他1984）・松木遺跡（青木他1984等）・えんぎ山遺跡・駒前遺跡・駒形遺跡、条痕文系土器を出土した大古里遺跡（青木・高野1976）・大北遺跡などがあり、条痕文系土器の段階には、北宿遺跡（青木他1985）のような地点貝塚も出現する。鴨川流域では、沈線文土器・条痕文土器を出土した水判土遺跡が知られている。

前期前半以後、海進にともない台地内部に多数の貝塚が形成された。芝川流域では、黒浜期を中心に、山崎貝塚・白幡貝塚・大古里遺跡などが著名で、花積下層式段階の北宿遺跡、関山段階の大古里遺跡・井沼方遺跡等の集落も知られている。元荒川・綾瀬川流域には、花積下層式段階の大宮市宮ヶ谷塔貝塚（山形1985）、関山期の関山貝塚、黒浜期の代山貝塚などが、鴨川流域には早期末葉の上尾市平方南貝塚、大宮市側ヶ谷戸貝塚、浦和市真福寺貝塚、並木貝塚などが分布している。

黒浜期から諸磯a期以後、海水面が低下すると低地に自然堤防の形成がはじまる。荒川低地内部に人間が痕跡をとどめるのもこの頃である。戸田市本町では十三菩提式土器が出土した（戸田市1981）。

前期後葉には、台地上面の遺跡は極端に減少する。我が国最小の土偶を出した松木遺跡、本太五丁目遺跡、皇山遺跡（村田1998）などがある。

これ以後、中期から後期初頭まで、遺跡分布は希薄な状態が続く。各遺跡の様相は、加曾利EⅢ式段階から称名寺式段階が中心で、集落規模の大きい馬場小室

山遺跡（青木他1983等）を除けば、原山坊ノ在家遺跡（柳田他1987）・四本竹遺跡（田中1992）・上尾市中妻三丁目遺跡（橋本1994）・浦和市馬場小室山遺跡（中村他1985）・与野市札ノ辻遺跡等の小規模遺跡があげられる程度である。特に低地部では、ほとんど遺跡がみられない。

後期から晩期になると、安行式段階を中心に集落が展開した。芝川流域では、土偶装飾付土器・人面付土器を出土した馬場小室山遺跡（青木他1983等）、白幡中学校校庭遺跡等がある。白幡中学校校庭遺跡では、荒海式段階の住居跡も検出された（青木他1977）。

鴨川流域を含む大宮台地西縁部では、当該期に自然堤防が形成され始めたと考えられている（三友1965）。大久保条里遺跡（山田他1990）における放射性炭素による年代測定や大宮市B-66号遺跡（山口他1991）における自然堤防堆積層中の出土遺物は、この見解を支持するものとなった。

弥生時代の遺跡は、中期以後に出現する。最古の例は、日進与野支台から自然堤防へ移行する低地内に立地する本村遺跡で、かつて須和田式といわれた土器を出土した集落跡である。その他の遺跡は芝川流域の台地上面を中心に分布しており、北宿遺跡・円正寺遺跡（天野他1991）・明花向遺跡等の宮ノ台式期が中心である。日進与野支台における宮ノ台式期の集落は内道西遺跡で検出されている。

いわゆる弥生町式期になると、台地上面のほか、自然堤防上の遺跡が増加する。台地上面の遺跡には、環濠集落と墓域からなる与野市中里前原遺跡（宮内1980等）、中里前原北遺跡（西口1996）、上太寺遺跡、浦和市馬場北遺跡（中村他1988）、方形周溝墓の主体部から鉄剣とガラス玉を出した井沼方遺跡（柳田他1994）等がある。東海系土器の出土もこの時期の特徴で、戸田市鍛冶谷新田口遺跡等が著名である。自然堤防上の遺跡は近年事例が増加しつつあり、五関中島遺跡（君島1996）、本村遺跡、上大久保新田遺跡、神田天神後遺跡（君島1999）等がある。

弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての遺跡は、

第2図 周辺の遺跡



- | | | | | | | | | | | | | |
|------------|------------|-------------|--------------|-----------|------------|---------------|----------------|--------------|-------------|------------|--------------|-----------|
| 1 白鞆宮腰遺跡 | 7 御嶽山古墳 | 13 大久保条理遺跡 | 19 山久保遺跡 | 25 金剛塚古墳 | 31 神田天神後遺跡 | 37 塚山古墳 | 43 間ノ谷遺跡 | 49 中里前原北遺跡 | 55 円正寺遺跡 | 61 歌前遺跡 | 67 北宿遺跡 | 73 代山遺跡 |
| 2 八王子殿ノ前遺跡 | 8 かね山古墳 | 14 宿宮前遺跡 | 20 札ノ辻遺跡 | 26 西金剛塚古墳 | 32 堤防下古墳 | 38 古貝戸遺跡 | 44 水判土堰の内遺跡 | 50 中里前原遺跡 | 56 明花向遺跡 | 62 駒形遺跡 | 68 大古里遺跡 | 74 上太寺遺跡 |
| 3 白鞆遺跡 | 9 根切遺跡 | 15 大泉院境内遺跡 | 21 真鳥山遺跡 | 27 庚申塚 | 33 五間中島遺跡 | 39 側々谷戸古墳群 | 45 大宮市B-105号遺跡 | 51 真福寺貝塚 | 57 井沼方遺跡 | 63 水深北遺跡 | 69 北宿西遺跡 | 75 上太寺東遺跡 |
| 4 宮田墓地遺跡 | 10 白鞆古墳群 | 16 大久保領家遺跡 | 22 大久保古墳群 | 28 堤根遺跡 | 34 大久保3号墳 | 40 西浦一号遺跡 | 46 並木貝塚 | 52 別所遺跡 | 58 大北遺跡 | 64 松木遺跡 | 70 山崎貝塚 | |
| 5 神田古墳 | 11 在家稲荷遺跡 | 17 上大久保新田遺跡 | 23 本村遺跡 | 29 観音塚古墳 | 35 塚本東耕地遺跡 | 41 大宮市B-66号遺跡 | 47 植木古墳群・原遺跡 | 53 白幡貝塚 | 59 本太五丁目遺跡 | 65 馬場小室山遺跡 | 71 皇山遺跡 | |
| 6 白鞆塚山古墳 | 12 観音寺境内遺跡 | 18 内道西遺跡 | 24 大久保領家片町遺跡 | 30 天神山古墳 | 36 神明寺山古墳 | 42 側々谷戸貝塚 | 48 笠間神社遺跡 | 54 白幡中学校校庭遺跡 | 60 原山ノ坊在家遺跡 | 66 馬場北遺跡 | 72 大宮市B-5号遺跡 | |

芝川流域および鴨川右岸の日進与野支台西側に集中する傾向がある。鴨川流域に限れば、多数の方形周溝墓を検出した大久保領家片町遺跡(柳田他1996等)、住居跡を検出した例では神田天神後遺跡(君島1999)・原遺跡・西浦一号遺跡・大宮市B-5号遺跡等があげられる。東海・東京湾東岸部・関東東部など、隔地に主要な分布域をもつ土器群の出土傾向に、大宮台地内部における地域色が顕著に現れる時期であり、いわゆる弥生町式期の一部を含め、編年上の位置づけについても流動的である。

大宮台地南部における前期古墳の状況は、明確になっていない。川口市高稲荷古墳が最初の例といわれるが、内容については詳らかでない。

古墳時代中期になると、日進与野支台上の白鍬宮腰遺跡内に白鍬塚山古墳が出現する。白鍬塚山古墳は、墳丘径30m程度の円墳、もしくは前方後円墳で、出土したB種ヨコハケ調整の円筒埴輪から、5世紀後半の築造と考えられている(山田他1989)。周辺には、当該期の集落は少なく、今回報告分の調査範囲に隣接する平成3年度調査範囲(第3地点)で当該時期から後期にかけての竪穴住居跡4軒が検出されたほか、山久保遺跡・別所遺跡・水深北遺跡・与野市札ノ辻遺跡・笠間神社遺跡等が確認されているにすぎない。なお、白鍬宮腰遺跡と同一遺跡群を構成する白鍬遺跡内、および隣接する与野市八王子殿ノ前遺跡では、ともに工事中に古式須恵器が出土している。

後期には、河川沿いの台地上に広く群集墳が形成される。白鍬古墳群・大久保古墳群(両者を広く大久保古墳群と呼ぶ場合もある)のほか、側ヶ谷戸古墳群・植水古墳群等があり、白鍬古墳群中の白鍬塚山古墳・御嶽山古墳・かね山古墳(宮崎他1980)、大久保古墳群中の天神山古墳・観音塚古墳・西金剛塚古墳・金剛塚古墳・大久保3号墳・堤防下古墳・神明寺山古墳・塚山古墳・神田古墳等、現在でも墳丘が残る例が認められる。

同時期の集落は、河川沿いの台地上や自然堤防上に立地し、古墳群と関連した形成状況が想定できる。白

鍬宮腰遺跡と鴨川を挟んで隣接する根切遺跡第3地点では、当該期の竪穴住居跡7軒が検出されている(宮滝1993)。このほか水判土堀の内遺跡(宮滝1993)・堤根遺跡・上大久保新田遺跡(柳田他1987)・本村遺跡・大宮市B-105遺跡・塚本東耕地遺跡・古貝戸遺跡等がある。

古墳群と集落の立地から、この時期までには自然堤防を形成する沖積層の堆積が終わり、現在の地形の基盤が完成していたと考えられる。

奈良・平安時代には多くの集落が台地上・自然堤防上に出現する。白鍬宮腰遺跡平成3年度調査範囲・水判土堀の内遺跡・根切遺跡・馬宮遺跡・在家稲荷遺跡・観音寺境内遺跡・宿宮前遺跡・大泉院境内遺跡・宮田墓地遺跡・大久保領家片町遺跡・本村遺跡などがある。大久保領家遺跡では、八葉複弁蓮華文鏡瓦等が出土しており、道場寺院跡との関連が想定されている。上記の遺跡の多くでは、布目瓦が出土しており、かつて郡家との関連について指摘されたことがある(青木1971)。近隣には天長三(826)年創建とされる慈眼寺、天長六(829)年創建とされる慈宝院、貞観五(863)年創建とされる林光寺等の古刹が点在している。

律令期の生産遺跡として古くから注目されていたものに、日進与野支台南西の低地に展開する大久保条里遺跡がある。三友國五郎は表層条里型地割を検討し、4里分程度の小規模条里と考えた(三友1959)。大久保条里遺跡は、浦和市遺跡調査会および当事業団が数次にわたり調査しているが、南北方向の溝状遺構と畦畔状遺構が検出された(君島1999)にとどまり、坪型区画となる部分はなく、現状では評価できる対象にない。表層条里型地割の多くが律令期の条里型地割の一部を利用し、もしくは延長し、中世以後に再構築されたもので、古代の地割を示すと限らないことは、近年の埋没条里の調査で明らかである(岩田1998)。周辺遺跡との関係も今後に期するところといえる。

中世段階の遺跡には、大久保領家遺跡・根切遺跡・真鳥山城遺跡等がある。大久保領家遺跡では鎌倉時代と考えられる住居跡と同時期の中国製青白磁が出土し

た(山田他1996)。根切遺跡は鎌倉幕府御家人足立右馬允遠元の館跡と推定されているが、陶器片が出土した程度で明瞭な遺構は検出できていない。真鳥山城遺跡は真鳥日向守の館跡と推定されている。中世の竪穴1基と中国産青磁片・国産陶器片等を得ているが、出土遺物の主体は17～18世紀代の陶磁器片であり、館跡の状況は明確にできていない(柳田他1997)。

大宮台地南部は、近世段階に大規模な開拓が行われたことで知られている。慶長年間(1596～1615)には、伊奈備前守忠次による灌漑・遊水事業として備前堤が築かれた。八代将軍吉宗の享保改革にともなう新

田開発では、享保十三(1728)年、井沢弥惣兵衛為永の指揮のもと紀州流の干拓工法をもって、現市内東部の「見沼」が水田化された。翌享保十四(1729)年には、現中浦和駅近辺の「鴻沼」が同様に干拓され、水田となっている。見沼田圃には現在も当時の状況を見ることができ、³「鴻沼」は減反政策と宅地化によってほとんどが失われてしまった。

その他の近世の遺跡には、陶器・瓦を出土した庚申塚(高山他1983)があり、瓦の年代から18世紀代と考えられている。

Ⅲ 遺跡の概要

過去の調査成果の概要

白鍬宮腰遺跡は、大宮台地西部の日進与野支台が侵食と堆積を受けた台地西端部分に立地している。遺跡の範囲は、南北約650m、東西200m程度であるが、白鍬古墳群の分布範囲を入れると南北は1000m程度になる。現地表面の標高は、馬背状になる遺跡中央付近で9.7m、南側に次第に低くなり南端部で8.0m、東部で8.5m程度、西部の鴨川沿岸で7.5m前後である。

周辺には、台地の開析によって形成された樹枝状の小支谷と荒川の氾濫によって形成された自然堤防が発達しており、微高地を単位に多数の遺跡が分布している。白鍬宮腰遺跡のある日進与野支台上には、隣接して白鍬遺跡・与野市八王子殿ノ前遺跡が所在する。白鍬遺跡については、白鍬宮腰遺跡を中心に分布する古墳群である白鍬古墳群の一角をなすものであり、両遺跡をとりたてて区別する理由は認められない。殿ノ前遺跡では、工事中に初期須恵器（脚部一段透しの把手付無蓋高杯と俵形甕）が検出されており、位置関係および白鍬宮腰遺跡での初期須恵器の出土などからみて、同一遺跡の可能性が高い。なお、出土遺構は溝状の土壙とされている。

鴨川の対岸にある荒川によって形成された自然堤防一帯には、南北1500m、東西250m程度の範囲にわたって根切遺跡が存在する。根切遺跡は、古墳時代後期から奈良時代を中心とする集落と縄文時代以後の包含層によって構成される遺跡である。明治14年、大日本帝国陸軍測量の迅速図や、大宮台地および荒川低地の形成過程を考慮すると、鴨川の流路が古墳時代後期以後大きく変化したとは考えにくく、根切遺跡を白鍬宮腰遺跡と同一地形上に形成されたとする根拠は大きくない。しかし、白鍬宮腰遺跡・白鍬遺跡の重要な要素である古墳時代後期の群集墳に対応する時期の、もっとも距離的に近接した集落跡として認知する必要はある。鴨川をはさんで、明確に遺跡内容が異なることは、示唆的であるといつてよい。

遺跡は、主に縄文時代中期後半から後期初頭頃の住居跡および包含層と、古墳時代前期の集落跡、古墳時代中期から後期の群集墳によって構成されている。古墳については、1998年現在、かね山古墳（円墳、径25m、高さ2.5m）、権現塚古墳（円墳、径10m、高さ1.5m）、御嶽山古墳（円墳、径20m、高さ2～3m）、白鍬塚山古墳（円墳、径40m、高さ2～3m）が現存している（墳丘規模のうち径については埼玉県古墳詳細分布調査（埼玉県1994）に、高さについてはかね山古墳報告（宮崎他1980）による）。

白鍬地区に分布する遺跡群は、過去に調査が行われている。ここで、調査成果の概要をまとめておこう。

白鍬宮腰遺跡の調査は、浦和市教育委員会によって行われた1960（昭和35）年の古墳分布調査を端緒とする（浦和市教育委員会1961）。しかし、1959（昭和34）年には白鍬遺跡出土の土師器・須恵器が報告されており（大塚・坂本1959）、位置的には与野市八王子字苗塚から白鍬字宮腰にあたることから、これを最初の遺跡内容の公表とすることができる。

1964（昭和39）年には、埼玉大学考古学研究会による荒川下流域の総合調査で、かね山古墳・前山古墳・権現山古墳・御嶽山古墳（当時、あそび塚）・白鍬塚山古墳（当時、無名墳）が測量調査された（埼玉大学考古学研究会1967）。

1965（昭和40）年8月には、白鍬遺跡第1号墳北西（白鍬410番地の旧老川鉄鋼株式会社敷地内）より、工事中に土師器杯・鉢をともなって須恵器壺が出土している（青木1966）。

1971（昭和46）年には、宅地造成にともない、かね山古墳の周溝が調査され、深さ1.3m程度の周溝が検出された。出土遺物は、タテハケの円筒埴輪片と古墳時代前期の土師器片のほか、貝殻条痕文をもつ縄文土器片が得られた。報告は1980（昭和55）年に行われており、かね山古墳の周溝内径を20～30m程度と推定している（宮崎他1980、浦和市郷土文化会1971）。

1984(昭和59)年には、宅地造成にともない白鍬宮腰遺跡が調査され、平安時代の竪穴住居跡1軒、時期不明の溝跡6条、土壙1基が報告されている(高山他1985)。近年における周囲の調査状況を見ると、報告書の記載にもあるとおり、溝跡のうち2条は1つの古墳跡と考えられ、その他の溝跡についても古墳跡、土壙の可能性はある。

1985(昭和60)年には、再びかね山古墳が調査された。ブロック塀建設に先立ち、西側墳裾部分が対象地となり、墳丘内から円筒埴輪片が出土している(高山・小宮山1986)。墳丘下は、縄文時代中期後半から古墳時代前期の遺物包含層となっていた。

1988(昭和63)年には、白鍬塚山古墳が調査されたが、古墳時代の土師器片の検出以外、顕著な成果は得られなかった(浦和市教育委員会1988)。同年には、共同住宅建設に先立って白鍬宮腰遺跡が調査され、白鍬塚山古墳周溝、円形周溝墓と判断された円墳2基、部分的な粘土被覆をもつ埋葬施設跡1基、中世の掘立柱建物跡、竪穴、溝跡を検出した。白鍬塚山古墳周溝からは、B種ヨコハケ調整の朝顔形埴輪・円筒埴輪、土師器、滑石製剣形などが出土し、白鍬塚山古墳が5世紀後半の築造であることが明らかになった。円墳は後期のもので、「1号周溝墓(報告書の用語)」の周溝から土師器・須恵器片が、「2号周溝墓」の主体部から白銅製乳文鏡・鉄鏃・直刀片、周溝から土師器・紡錘車・玉類が出土した。埋葬施設跡からは刀子片が出土した(山田他1989)。

1989(平成元)年には銀行新築に際して白鍬遺跡が調査され(第1地点)、古墳時代後期の円墳1基、平安時代の土壙1基、溝跡1条、近世の土壙1基、溝跡2条が検出された(山田他1990)。

1991(平成3)年には病院建設にともない白鍬遺跡が再び調査された(第2地点)。1989年調査範囲隣接地にあたり、1989年に調査した古墳時代後期の円墳周溝の南西部分が検出された(柳田他1995)。連続する地点は第3地点として同年中に調査され、溝状の遺構が検出されている(中村他1992)。

1991(平成3)年には、白鍬宮腰遺跡でも調査が行われ、円墳と思われる「円形周溝(報告書の用語)」1箇所、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡4軒、時期不明の竪穴状遺構1基、土壙1基が検出された(中村他1992)。

白鍬地区で行われてきた調査では、多くが個人住宅や小規模な建設工事にともなうものであるため、遺跡の全体像を把握するための情報は不足してきた。比較的広範囲に調査を行った今回の調査は、遺跡の形成過程から各時代・時期の様相について把握することに主眼を置いた。

今回の調査の概要

本書で報告する白鍬宮腰遺跡の調査は、県営住宅の建設にともない、当事業団が平成8年度に実施したもので、同遺跡では6回目の調査にあたる。

遺跡は大宮台地東部の日進与野支台が、荒川による浸食と堆積、鴨川による開析を受けたもので、一部に沖積堆積層を形成している。調査対象地は遺跡の中央北よりの部分で、台地上面頂部にあたる。現地勢は標高9.5m程度の平坦地である。

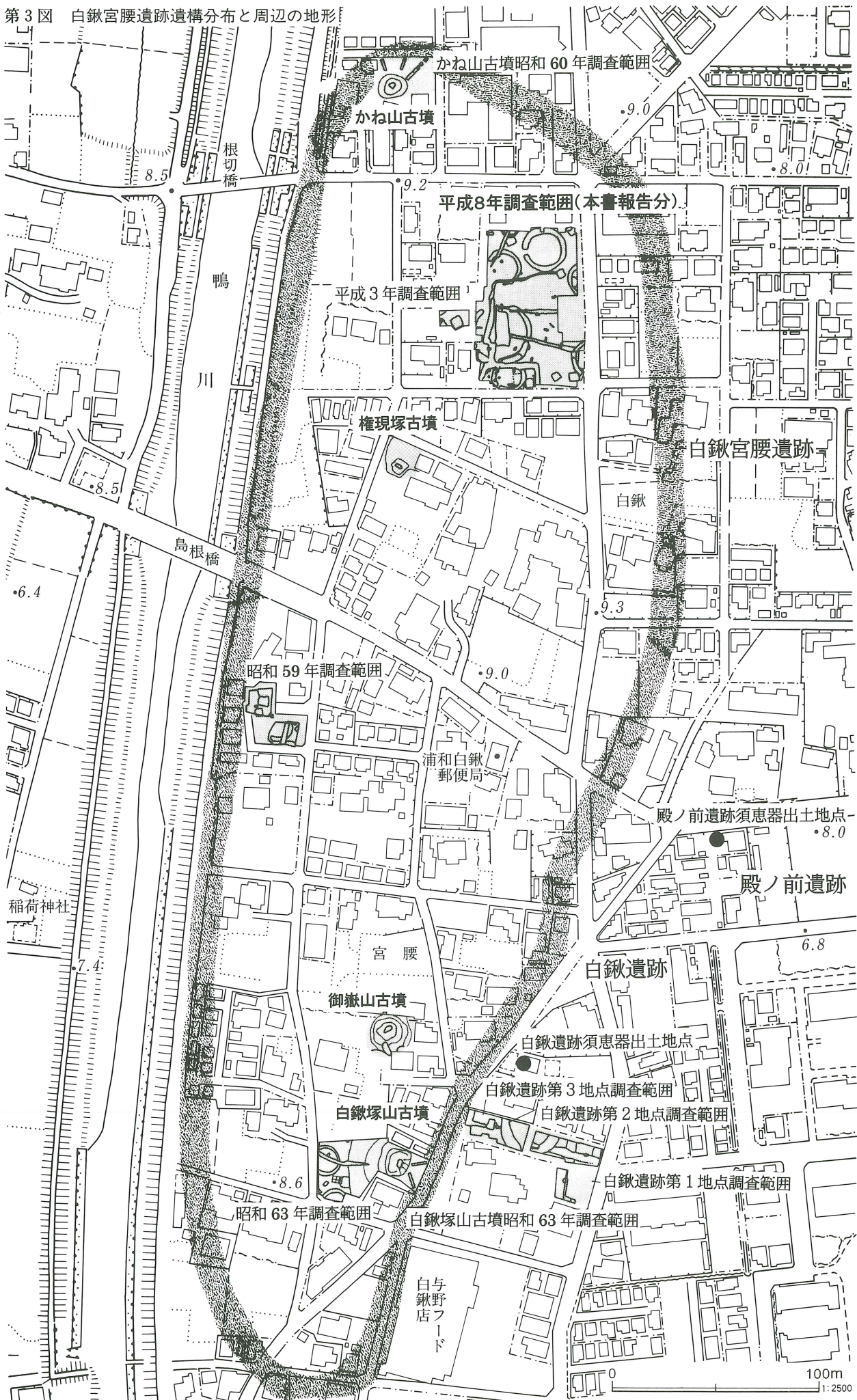
調査範囲内の基本的な層序は、上部を層厚15~20cm前後の暗灰褐色の現代建築物による攪乱層が覆い、直下に、武蔵野台地第2黒色帯に対応すると思われる暗褐色ロームが露出していた。本来、縄文時代以後の表土を構成する地盤は、鴨川・荒川等による浸食と宅地化にともなう攪乱・削平によって、失われたものと考えられる。

基本層序は以下、やや明るい黄褐色で層厚30~40cmのローム層が2層、暗黄褐色で層厚30~40cmのローム層、黄褐色のローム層と続く。

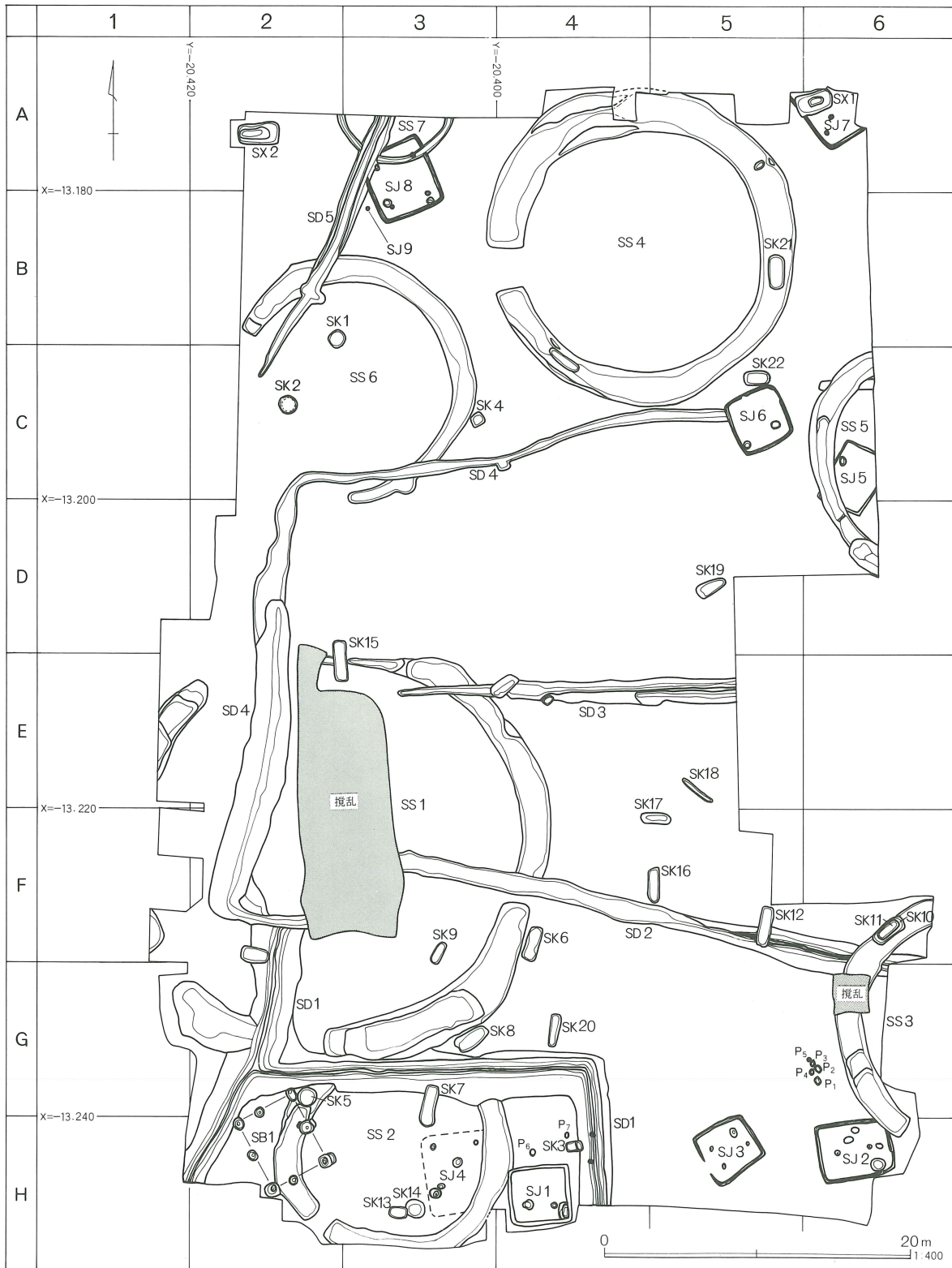
調査範囲北部には、上部に層厚30~40cmの黒褐色の沖積堆積層、層厚20cm前後で黒褐色のローム漸移層、層厚20cm前後のソフトローム層が確認できた。ハードローム層以下への掘り下げは、諸般の事情により行うことができなかった。

表土除去後の平面確認調査では、第2黒色帯がB2

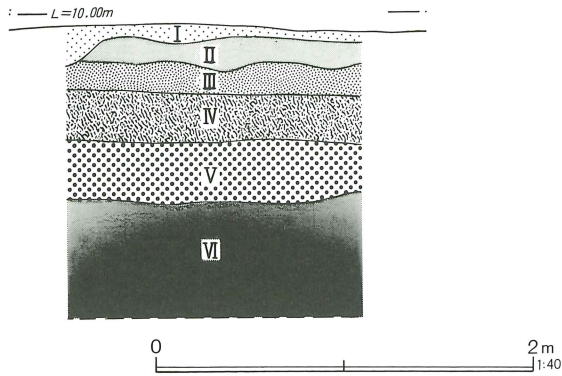
第3図 白鍬宮腰遺跡遺構分布と周辺の地形



第4図 調査範囲全測図



第5図 基本土層



- I 暗灰褐色 現代攪乱層
- II 暗褐色 ローム 赤色・黒色スコリア少 第II黒色帯
- III 黄褐色 ローム 赤色・黒色スコリア少
- IV 黄褐色 ローム 赤色・黒色スコリア少
- V 暗黄褐色 ローム 赤色・黒色スコリア少
- VI 黄褐色 ローム

グリッド付近からG5グリッドにのび、この南西側には明るい色調のローム層が露出していた。沖積堆積層は調査区北側のB2グリッドとC5グリッドを結ぶ線より北に、北東方向に厚く堆積していた。これらの状況から、調査範囲南西部のローム層は第2黒色帯下のもので、削平以前の地勢は南西あるいは南部から北東方向へ傾斜していたことがわかる。

調査区北西の沖積堆積物層は、縄文時代中期後半の遺物包含層となっていた。古墳時代の遺構は、この堆積層上層に掘り込まれており、古墳時代までには沖積層の堆積が終了していたと考えられる。

上記のような条件から、今回の調査で検出した遺構は底部付近のものが多く、元来掘り込みの浅いものについては失われた遺構が少なくなかったと想像できる。

検出した遺構の内容は、縄文時代中期後半の深鉢形土器を炉体に用いた住居跡1軒、古墳時代前期の住居跡8軒、古墳時代後期の古墳跡7基、部分的な粘土被覆をもつ埋葬施設跡2基、奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟、中世から近世の溝跡5条、同時期と思われる土壇22基である。

白鍬地区で従来行われた調査では、古墳時代中期から後期の竪穴住居跡4軒・円墳13基（存在が伝承されている神田古墳跡を含む。また、白鍬塚山古墳は円墳とした）・埋葬施設跡1基などが検出されており、今回の成果をもって、円墳は20基、埋葬施設跡（部分的な粘土被覆をもつもの）は3基となった。

縄文時代の遺構は、中期後半加曾利EⅢ式期の住居

跡と思われる炉体土器1基に限られるが、調査範囲北西部の沖積堆積層が加曾利EⅢ式期の遺物包含層となっており、多量の土器片と少量の石器を得ることができた。日進与野支台が鴨川へ向かう斜面地にあたり、台地上面に集落が存在したが、浸食と削平によって消滅したことを想像させる。

古墳時代の遺構は、主に前期の住居跡と後期の古墳群に分けられる。古墳時代前期までには堆積作用が収束しており、沖積堆積物上に遺構が作られていた。もっとも標高の高い調査範囲中央部を除き、住居跡が点在していた。いずれも短辺5m、長辺5～6m程度の方形または長方形平面の竪穴住居跡であったが、遺存状態は悪く、床面付近で検出したものが多い。出土遺物も少なく、生活段階にともなう状況を把握できた例はなかった。

古墳の周溝に多量の当該期土器片が混入していたこと、調査範囲中央部にあたる最高点付近が削平されていたことを考えると、住居跡の本来の分布範囲が、調査範囲全体を占めていた可能性は低いだろう。第2・3号住居跡付近のH6グリッドでみつかったP2を中心としたピット群は、同時期の住居跡の貯蔵穴および柱穴であった可能性が高い。

後期の古墳群は白鍬古墳群の一部をなすもので、後期初頭から7世紀初め頃までに構築されたものと考えられる。規模は周溝内径が7m～21mで、遺存状態のよい古墳跡のうち後期前半までに構築されたものでは周溝の南西側に陸橋があることを共通点としていた。

第1・2号古墳跡の周溝には切り合いがあったと思われる、最高点付近を除くと高い密度で分布しており、削平により消滅した古墳の存在も予想される。第4号古墳跡等、後期初頭の古墳を中心に、赤彩され、あるいは穿孔された土師器杯が複数、周溝中から出土している。他に、鉄鏃・刀子を出土した埋葬施設跡2基もみつかり、従来の調査成果と合わせ、白鍬古墳群の群構造の特徴が顕著に現れたといえる。なお、出土遺物に埴輪はなかった。

律令期の遺構は2間×2間の掘立柱建物跡1棟がみつかったが、他に同時期の遺構は検出できなかった。古墳の周溝から「田」の墨書のある須恵器杯が出土しており、やはり最高点付近に削平された遺構の存在が推定できる。

中・近世の遺構では、鴨川の流路方向とこれに直交する溝跡を検出した。上層を削平されているにも関わらず、上端の幅で5mを越えるものがあり、ほぼ直角に曲がるなど、区画溝として掘削された可能性がある。出土遺物は主に13世紀代の中国産青磁・18世紀代の肥

前焼の磁器などである。他に、調査範囲全体に散在する平面長方形の土壙を検出したが、出土遺物は掘削時の表土に包含されていたとみられる古墳時代前期の土師器細片が主体で、本来的に土壙にとまなうと思われるものは検出できなかった。長軸方位を南北にとるものが多かったが、配列に規則性はなかった。

この他、土壙内等より、旧石器時代に属するナイフ形石器3点が出土した。上層の削平によって攪乱されたもので、出土層位等は明確でないが、日進与野支台東端が旧石器時代から利用されていたことを示す資料の一つとなった。

白鍬宮腰遺跡・白鍬遺跡・八王子殿ノ前遺跡等、周辺における調査成果と比べ、今回の調査範囲付近が、長期間にわたって居住区・墓域として生活の舞台となっていたことがわかってきた。

白鍬宮腰遺跡は、周辺の遺跡群を含め、今後も部分的な調査が主体になると予想される。遺跡の全容を考える上でも今回の調査結果は重要であろう。

IV 遺構と遺物

1. 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代の遺物として、ナイフ形石器3点が出土している。これらは後世の遺構覆土中に混在したものであり、石器集中などは確認し得なかった。

縄文時代の遺構は中期後葉の住居跡1軒が見つかっている。住居跡は後世の削平を受け、炉跡を構成する炉体土器のみが残存していた。加曾利EⅢ式期の所産である。

調査区の北西部では縄文時代中期後葉の遺物包含層

(1) 住居跡

第9号住居跡 (第6図)

B3グリッド北西隅において炉体土器が見つかった (第6図)。

古墳時代、中・近世の遺構精査時に深鉢形土器の胴部上半の割れ口が見つかり、当初は埋甕の可能性もあるとして調査に着手したが、土器を埋設した円形の掘り込みの底面に火床を伴うことから埋甕炉であることが明らかとなった。

住居跡内の炉跡と考えられるが、炉体土器のみの検出であり、竪穴自体の平面形や炉跡以外の柱穴等の施設は確認し得なかった。

この炉体土器の周辺は第5号溝跡、第8号住居跡などが位置しており、こうした後世の遺構によって当住居跡は壊されている。

また、炉体土器は上部を欠損していることから、後世の削平を受けたことがうかがわれる。炉体土器周辺は住居跡床面の硬化部分も認められなかったことから、床面の高さまで削平の影響が及んだものと思われる。

第6・7図1が炉体土器であり、胴部下半を欠損した深鉢形土器を利用している。

径55cm、深さ20cmの円形の掘り込みに埋設されていた。第6・7図1を埋設する際に南側の部分ではこれに沿うようにして大形の破片が埋め込まれているのが確認できた。第6・7図2、4などがこれにあたる。

炉体土器の下端と火床面はほぼ同じ高さであった。

が認められ、加曾利EⅢ式が出土している。

また、調査区全般から、後世の遺構覆土中に混在して、もしくは遺構外から縄文時代中・後期の土器が出土しており、これについてはグリッド出土土器として一項を設けた。

なお、旧石器時代の遺物、縄文時代の遺物包含層出土石器、グリッド出土石器については旧石器時代および縄文時代の石器として一項を設けた。

火床面は赤く、きわめて硬化した状況であった。炉跡の火床面の径に相当する第6・7図1の残存部下端の径は28cmである。

炉体土器の外側にあたる埋設土は黒褐色土で、焼土・ロームの細粒をわずかに含むものであった。

炉体土器の内側にあたる覆土は黒褐色土で焼土、炭化物をほとんど含んでいなかった。覆土中からは大形の土器片が出土した。

覆土中の土器を接合したところ、第6・7図1から崩落したものは少なく、炉体土器内部の土器は炉跡の廃絶後、別の個体が廃棄されたものであった。第6図3・5がこれにあたる。

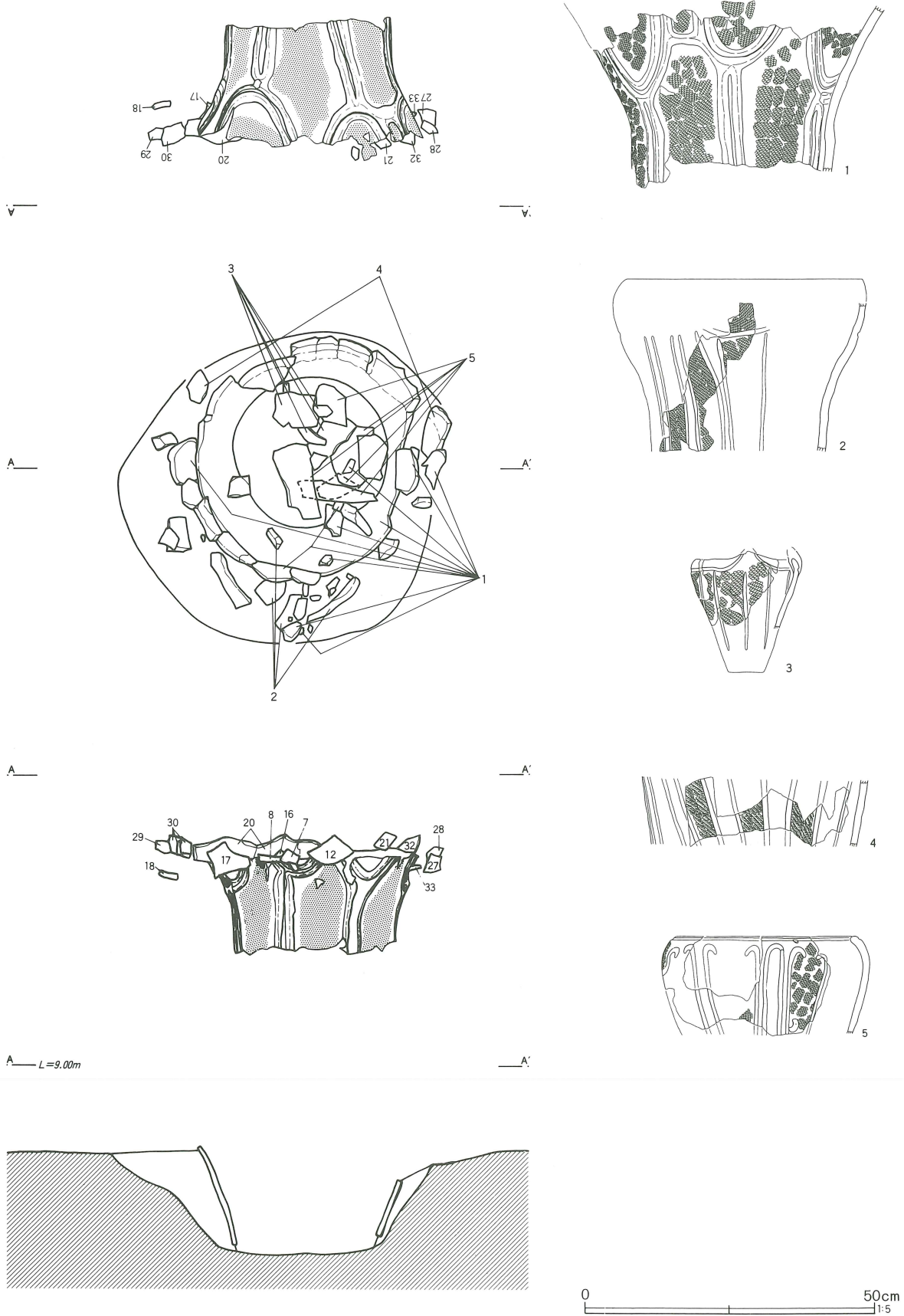
第9号住居跡出土土器 (第7図)

1は胴部中位でゆるく括れ、外傾して口辺部へ推移し、やや内湾気味に立ち上がる形態の深鉢形土器であろう。内湾する口辺部付近と胴部下半を欠損している。

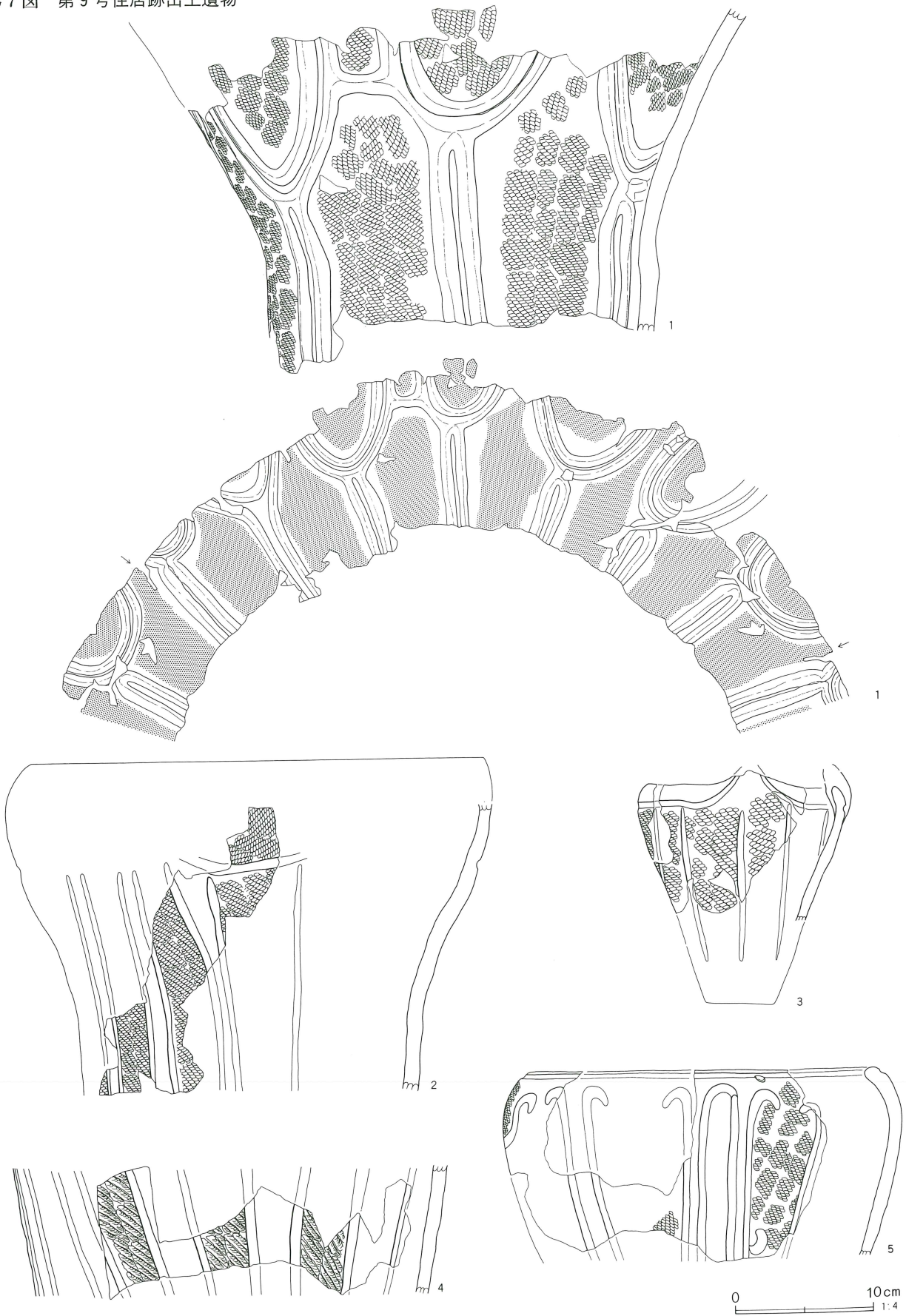
欠損部位が多く文様は判然としなかったが、渦巻き文を主要モチーフとし、その下位に懸垂文を施す土器であろう。左右どちら巻きの渦巻きかわかる破片は見いだせなかった。

渦巻き文と懸垂文は2本の隆帯で施文しており、全周で7回繰り返されている。隆帯は幅1～1.5cm程度で中央にかすかな稜線が認められる。渦巻き文を横位に連結する1本の隆帯が1箇所認められる。縄文は単節のLRを施す。懸垂文付近では縦位に渦巻き文内部では

第 6 图 第 9 号住居跡



第7图 第9号住居跡出土遺物



各種の方向に施す。全体の1/2程度の残存度である。

2はキャリパー形の深鉢形土器である。

口縁部と胴部下半を欠損する。口辺部近くに楕円区画文の下部が一部認められるが、口縁部文様の詳細は不明である。楕円区画文内部には横位に単節LRの縄文を施す。口縁部文様の直下から縦位の沈線による懸垂文を施す。沈線間には縦位に単節LRの縄文を施す。1/6以下の残存度である。

3は小形の深鉢形土器である。

胴部下半から口縁部へ直線的に移行し、口縁部が内湾して立ち上がる形態の土器である。突起部分は欠損している。口縁部には1条の横線を巡らせており、横線より上を無文としている。また、突起部分では口縁部にそって横線が立ち上がっている。横位の沈線の下

(2) 包含層

包含層の状況 (第8図～第10図)

調査区の北西隅、A2、A3グリッドにおいて、縄文時代中期後葉の遺物包含層が確認されている。

遺物包含層は黒褐色土であった。第8図に点線で示したのが黒褐色土の平面的な範囲である。

包含層は北側に向かってやや厚みを増して堆積しており、北東側の調査区外に緩やかに傾斜して伸びている。

包含層の南側に目を転じると、今回の発掘調査区のC～E列付近では立川ローム層第2黒色帯及びその下位の層序が古墳の周溝や溝など比較的掘り込みの深い遺構の確認面となっている。

したがって本来の地形は調査区中央部付近が高く、北側に向かって傾斜していたものと考えられる。北側の調査区外には谷地形の存在が予想される。

第9号住居跡のように後世の削平の影響を受けた住居跡があることから、削平によって壊滅的な影響を受けた住居跡もあったかもしれない。縄文時代中期の集落部分の北ないし北東は谷に面しており、谷に向かう台地際斜面に沖積土の埋積に伴って、遺物包含層が形成されたものと推測される。すなわち住居跡外における行動の痕跡を示すものである。

位には縦位の沈線文を施す。

単節LRの縄文を主として縦位に施すが、全体に施され、磨消縄文にはしていない。1/4程度の残存度である。

4はキャリパー形深鉢形土器の胴部破片である。縦位の沈線による磨消懸垂文を施す。無節Lの縄文を縦位に施す。1/6以下の残存度である。

5は胴部で丸みを帯び、口縁部が内湾気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。

口縁部に1条沈線が巡る。不整の貼付が認められる。体部には逆U字状の沈線、わらび手状の沈線を施し、磨消縄文としている。器面の状況は摩滅が著しく、縄文施文部は不明瞭である。単節LRの縄文を縦位、斜位に施す。1/6以下の残存度である。

いずれにせよ上記のような住居外における空間の利用は第9号住居跡と当包含層出土土器が中期末に限定される点から、複数の土器型式に及ばない短い期間の営為であったことが考えられる。

谷地形は沖積土の埋積によって平坦化したのち、第5号溝跡、第7号古墳跡、第2号埋葬施設跡などが、遺物包含層を壊して構築されている。

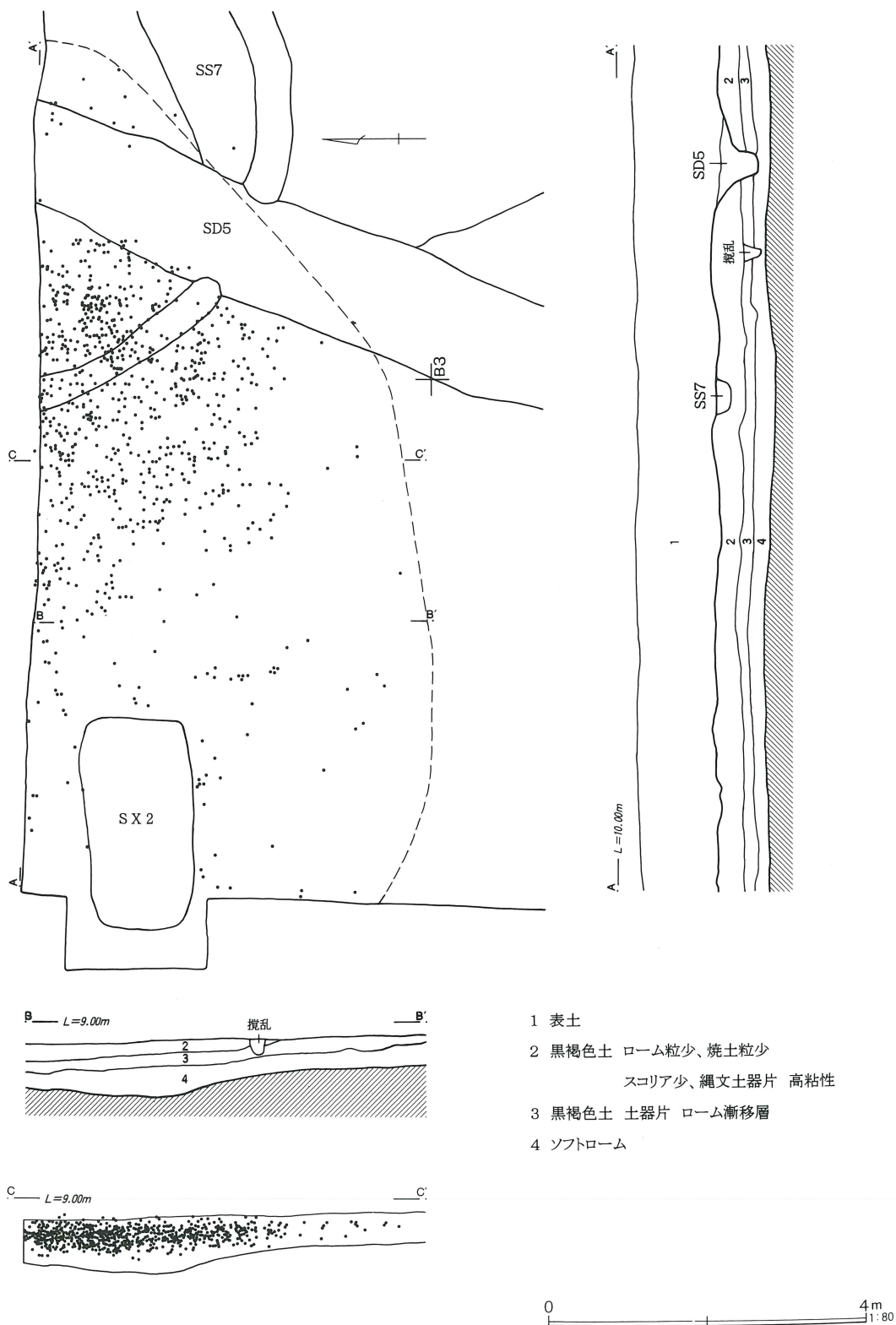
遺物の平面分布はA-2、A-3グリッドの境界付近にやや集中しており、西側ではやや散漫な出土分布であった。遺物の垂直分布は遺物包含層の高低差を反映して標高8.3m～8.8mの範囲に認められる。

包含層上部は削平の影響を免れなかったと推測される。残存していた遺物包含層の平均的な厚さは30cm前後である。

遺物包含層の黒褐色土はローム粒子、焼土粒子を少量含む粘性の高い土であった。その下層にはソフトロームとの間に漸移層(3層)を挟んでいる。3層の漸移層は2層の黒褐色土と4層のソフトロームを含む層であった。3層の漸移層から出土した土器片は少量であった。

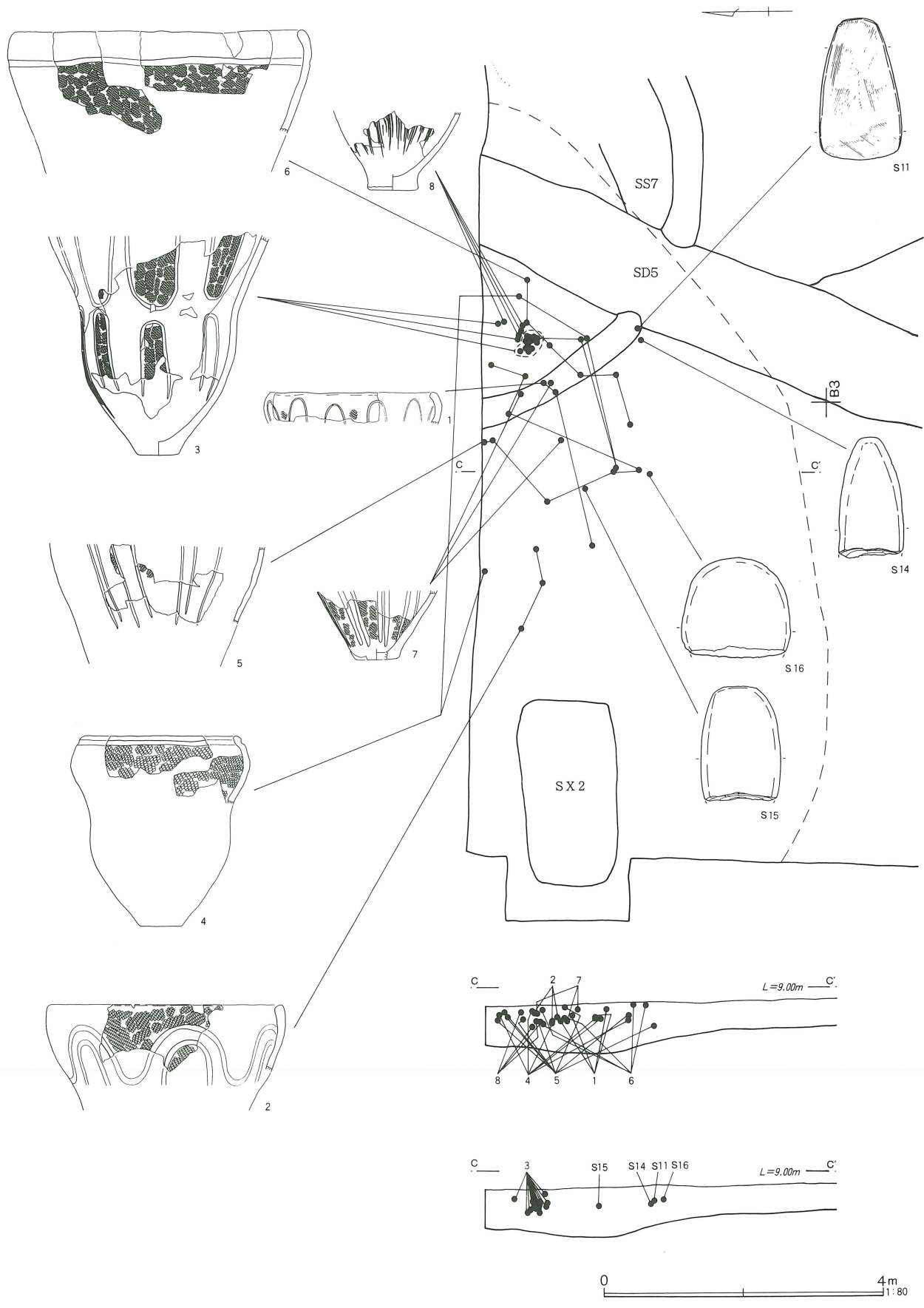
こうしたローム漸移層の安定した存在は、2層の黒褐色土が遺構の覆土ではなく、遺物包含層であること

第8図 縄文時代包含層遺物分布図

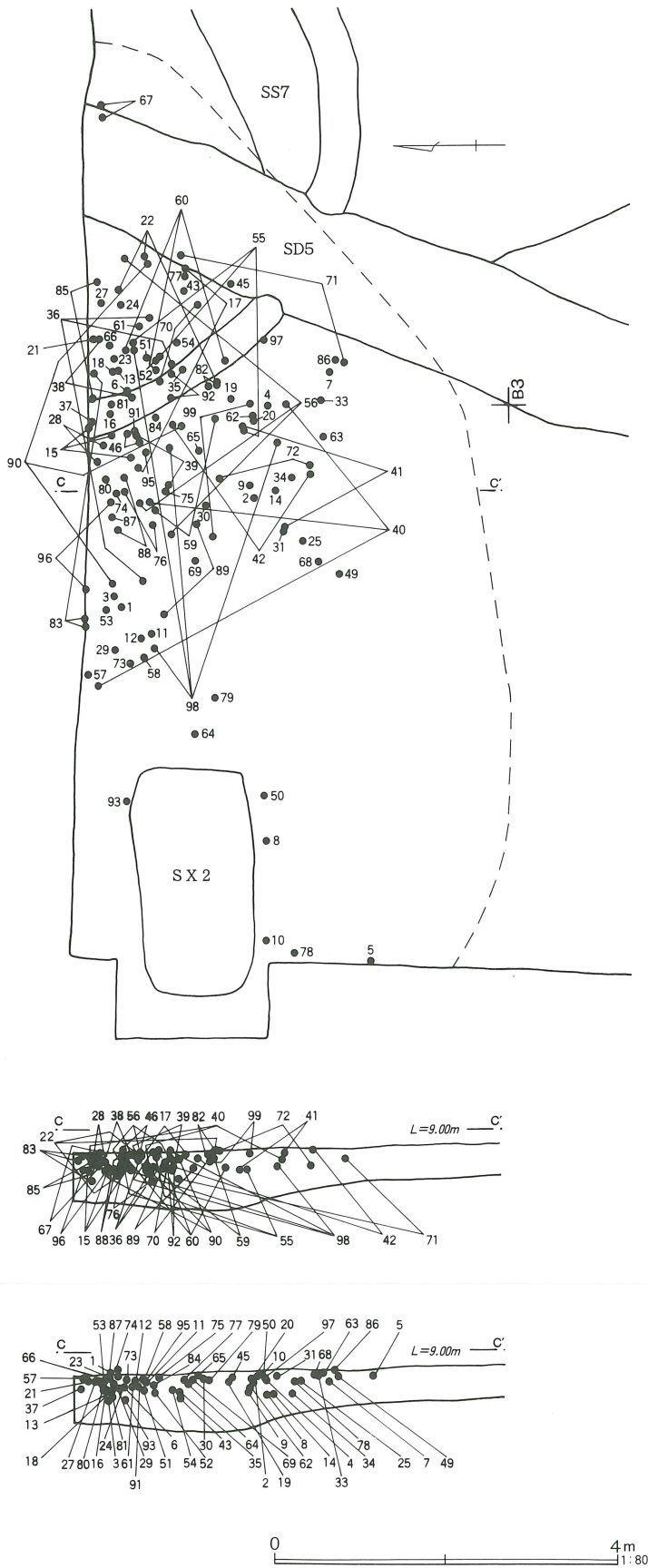


- 1 表土
- 2 黒褐色土 ローム粒少、焼土粒少
スコリア少、縄文土器片 高粘性
- 3 黒褐色土 土器片 ローム漸移層
- 4 ソフトローム

第9図 縄文時代包含層遺物出土状況(I)



第10図 縄文時代包含層遺物出土状況(2)



を示すものである。遺物包含層として調査を進める一方で、遺構の存在の可能性も皆無ではなかったため、2層の黒褐色土の調査終了後、3層上面や4層上面において遺構確認作業を行ったが、土坑や炉跡・柱穴等は一切認められなかった。

接合作業の結果、完形土器こそないものの比較的大形の破片となったものも少なくない。第11図に実測図として示した大形破片の接合状況を示したのが第9図である。拓影図に示した土器(第12~14図)の中にも2、3片の土器片が接合したものが少なからず認められた。これらの接合状況とそれぞれの出土位置を第10図に示した。また、第17図に示した縄文時代の石器のうち、11の磨製石斧、14~16の磨石も当包含層からの出土である(第9図)。

出土土器(第11図~第14図)

第11図に大形破片をまとめた。3が1/5程度の残存度であるほかは、いずれも1/6以下の残存度である。

1は口縁部が内湾して立ち上る形態の深鉢形土器である。逆U字状、もしくは波状の沈線文を構成するものと考えられるが、口縁部のみの破片であり、全体の構成は明らかでない。器面の状況は摩滅が著しく、縄文の施文は判然としない部分が多い。単節LRの縄文によって、磨消縄文を施している。

2は胴部で緩く括れ口縁部が内湾気味に立ちあがる形態の深鉢形土器である。口辺部に波状の沈線文を施し、逆U字状のモチーフとの組み合わせによって、磨消縄文を構成する。単節LRの縄文を各種の方向に施す。

3は底部から胴部へ丸みを帯び、緩く括れる形態の深鉢形土器である。口辺部付近は欠損しているが、口縁部が内湾する形態の土器であろう。

U字状の沈線を上下に対向させて、磨消縄文によるモチーフを施す。沈線施文後に単節LRの縄文を縦位に施す。

4は胴部で括れ、口縁部が内湾気味に立ちあがる形態の深鉢形土器である。口縁部に1条の横線を巡らせ、横線以下を縄文施文部としている。単節RLの縄文を横位、斜位に施す。

5は縦位の沈線による磨消縄文を施す深鉢形土器の胴部下半の破片である。沈線間に単節RLの縄文を縦位に施す。

6は底部から口縁部へ直線的に移行し、口縁部付近で内湾する形態の深鉢形土器である。口縁部に1条の横線を巡らせる。横線より上を無文とする。横線下に単節LRの縄文を縦位、斜位に施し、器面全体に縄文を施す。

7は底部の破片である。底部から胴部へやや直線的に立ち上る形態の深鉢形土器である。縦位の沈線による磨消縄文を施す。単節LRの縄文を縦位に施す。

8は底部の破片である。底部から直立気味に立ち上がり、丸みを帯びて胴部へと移行する形態の深鉢形あるいは鉢形土器である。条線文を縦位に施す。

第12図～第14図に拓影図をまとめた。

1～45は口縁部、および口辺部近くの破片である。

1～7はキャリパー形の深鉢形土器である。1～7は口縁部、8は口縁部近くの破片である。

1は口縁部の区画文内に縦位の細沈線を施す。2は口縁部の楕円区画を隆帯、沈線によって施し、区画文内に単節RLの縄文を施す。3は口縁部直下に横線を巡らせず、弧状の隆帯文を連続させて区画文を施す。単節LRの縄文を施す。4は口縁部の横線下に沈線による楕円区画文を施し、その内外に単節RLの縄文を施す。口縁部が肥厚する。5、6は沈線による区画文を施す。単節RLの縄文を施す。7は口縁部下に横線が認められる。口縁部が肥厚する。8は隆帯によって口縁部を区画する。単節RLの縄文を施す。

9、10は口縁部に刺突を施し、その下位に磨消縄文を施す。

9は内湾する口縁部を無文とし、円形の刺突が2列に巡る。10は竹管状の工具による刺突を2列に施す。刺突の下位には縦位の沈線を施し、沈線間に単節LRの縄文を縦位に施す。

11～24は底部から胴部へ丸みを帯びて立ち上がり、口縁部が内湾気味になる形態の深鉢形土器である。口縁部に横線を巡らせ、横線より上に無文帯をおく土器である。

11は単節RLの縄文を斜位に施す。12は横線が2条巡る。単節RLの縄文を施す。13は単節RLの粗い縄文を横位に施す。14は節の細かい単節LRの縄文を施す。15は節の細かい単節LRの縄文を縦位に施す。16は単節LRの縄文を施す。17は山形の突起を口縁部に施す。単節RLの縄文を施す。18～20は横線の部位の破片で、20は横線の下に沈線文を施す。21は横線下に縦位の沈線による磨消懸垂文を施す。縄文は無節Lを縦位に施す。22は体部に逆U字状の沈線文を施す。沈線内に単節RLの縄文を縦位に施す。おそらく、下端を開放する1段の懸垂文になると思われる。23、24は横線下に波状ないしはU字状の沈線を施し、磨消縄文とする。胴部で緩く括れる形態の土器であろう。単節RLの縄文を施文する。

25～30は11～22と同様な形態の深鉢形土器であるが、口縁部に横線、無文帯をおかないものである。逆U字状、もしくは波状の沈線文を施す。口縁部直下から縄文を施す。25は逆U字状の沈線内部を磨消部とする。単節RLの縄文を各種の方向に施す。26、27は単節LRの縄文を各種の方向に施す。28はおそらく逆U字状の沈線を施し、沈線内を無文とする。縄文はRLの縄文を横位、縦位に施す。29はおそらく波状となる沈線を施す。単節LRの縄文を横位、斜位に施す。30も逆U字状もしくは波状の沈線を施す。縄文の施文は不明瞭である。

31～42は隆帯を施した深鉢形土器である。

口縁部に1条隆帯を巡らせ、体部に沈線による磨消縄文を施す土器、口縁部の隆帯から直交して隆帯を垂下させ、磨消懸垂文とする土器などがある。形態的に

は底部から丸みを帯びて口縁部に移行し、口縁部が直立気味に立ち上げる形態、胴部に括れを有し、口縁部が内湾気味に立ちあがる形態の土器がある。

31、32は口縁部に1条、横位の隆帯を巡らせ、体部に沈線による磨消縄文を施す。単節RLの縄文を各種の方向に施文する。

33は隆帯を曲線的に施す土器と思われる。単節LRの縄文を施す。

34は口縁部に1条の隆帯が巡り、その下位に単節LRの縄文を施す。

35、36は口縁部に沈線と隆帯が巡る。口縁部の無文帯は幅が狭い。2条の沈線に挟まれた隆起帯を曲線的に施す。単節RLの縄文を各種の方向に施す。35、36は同一個体である。

37、38は無節Lの縄文を施す。

39～42は同一個体である。口縁部が直立気味に立ち上がる形態の深鉢形土器である。緩い波状の口縁部をしている。口縁部に横位の隆帯を巡らせ、それに直交するように縦位の隆帯を垂下させ、磨消懸垂文としている。隆帯間には縦位に、口縁部に巡る隆帯にも横位に縄文が施されている。単節LRの縄文を施す。

43～45は無文の口縁部である。外傾もしくは外反気味に立ち上がる形態である。両耳壺等であろう。

46～84は深鉢形土器の胴部破片である。いずれも縄文を施している。

46～49は隆帯を縦位に施す。46は単節LRの縄文を縦位に施す。隆帯にも施す。47～49は隆帯に沿って沈線を施す。単節LRの縄文を縦位に施す。

50～75は縦位の沈線が認められる磨消縄文を施した胴部の破片である。

全体の文様は不明なものが多いが、2条の縦位沈線間に縄文を施した磨消懸垂文やU字状、逆U字状の沈線内に縄文を施す文様などが主体を占めるものと思われる。

50～60はいずれも単節LRの縄文を縦位に施す。

54は縄文施文部にも縦位の沈線を施す。57はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部には楕円区画文を施す。胴部には縦位の沈線による磨消懸垂文を施す。

59は曲線的な磨消縄文を施す土器である。

61は無節Lの縄文を縦位に施す。

62～75は単節RLの縄文を縦位に施す。比較的薄手の作りの土器が多い。69は括れ部の破片でU字状の沈線文を施す。72～75などは磨消部がやや幅広である。

76～82は沈線によって胴部に各種の磨消縄文を施す深鉢形土器の胴部破片である。

76は胴部が張る部位の破片で、曲線的な磨消縄文を施す。単節RLの縄文を施す。77は直線的に移行する部位の破片で、曲線的、もしくは逆U字状の沈線を施す。単節RLの縄文を施す。78、79もU字状の沈線を施す。単節LRの縄文を施す。80は胴部中頃の部位の破片である。上下に対向するU字状の文様を施す。単節RLの縄文を施す。81、82も曲線的な沈線を施す。単節RLの縄文を施す。

83は曲線的な隆帯を施した深鉢形土器の胴部破片である。単節LRの縄文を施す。

84は無節Lの縄文を施した深鉢形土器の胴部破片である。

85は深鉢形土器の底部である。

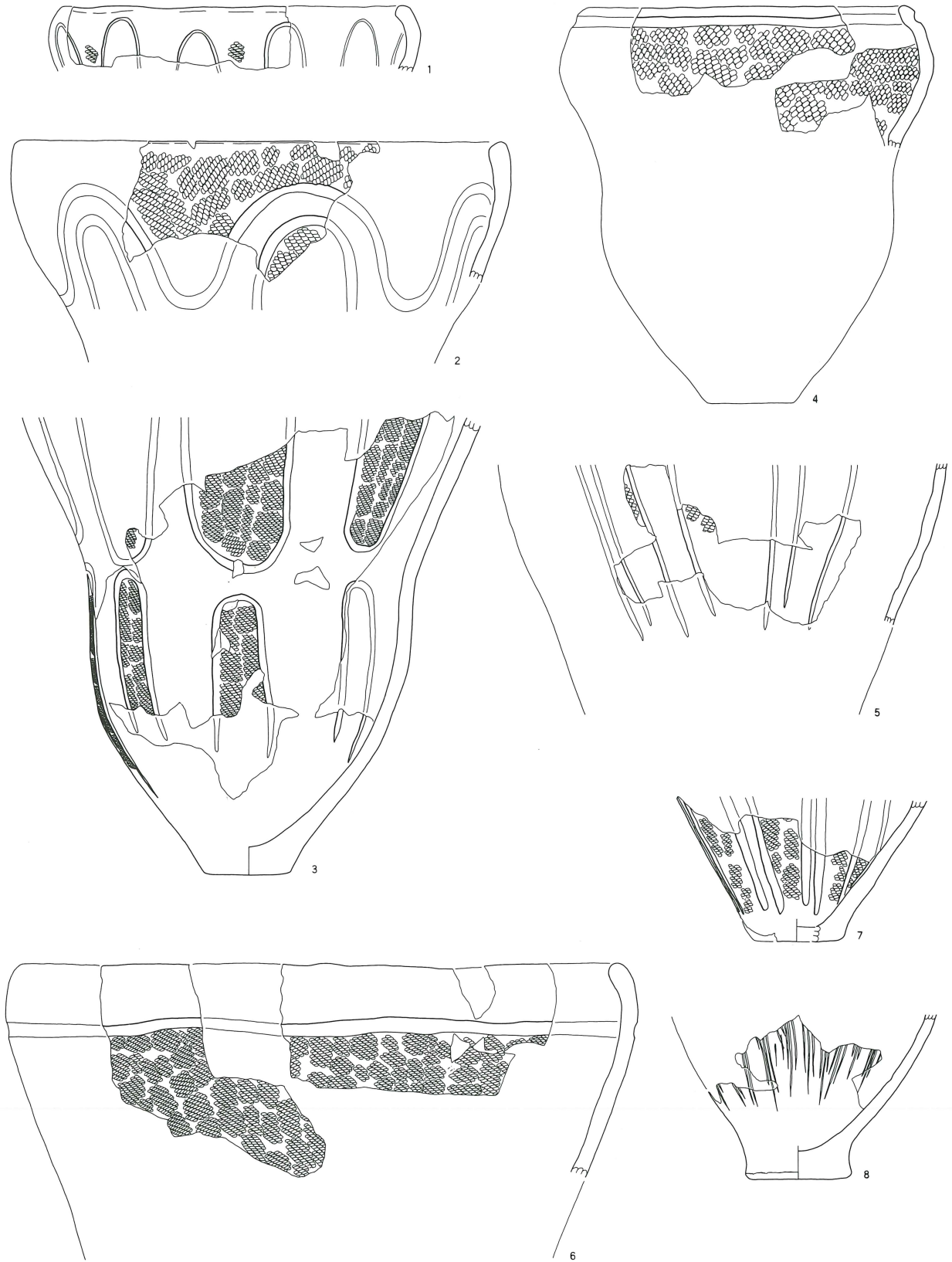
86～99に櫛歯状工具による条線を施す深鉢形土器、鉢形土器をまとめた。いずれも底部から胴部へ丸みを帯びて移行し口縁部が内湾気味に立ちあがるものや直線的に立ち上がる単純な形態の土器である。

86～89は口縁部の破片である。いずれも横線を巡らせて、口縁部に無文部をおき、横線下に縦位の条線を施す土器である。

90～96、98は縦位の条線を施す胴部の破片である。隙間なく条線を施す土器が多いが98は条線の単位間に隙間が認められる。

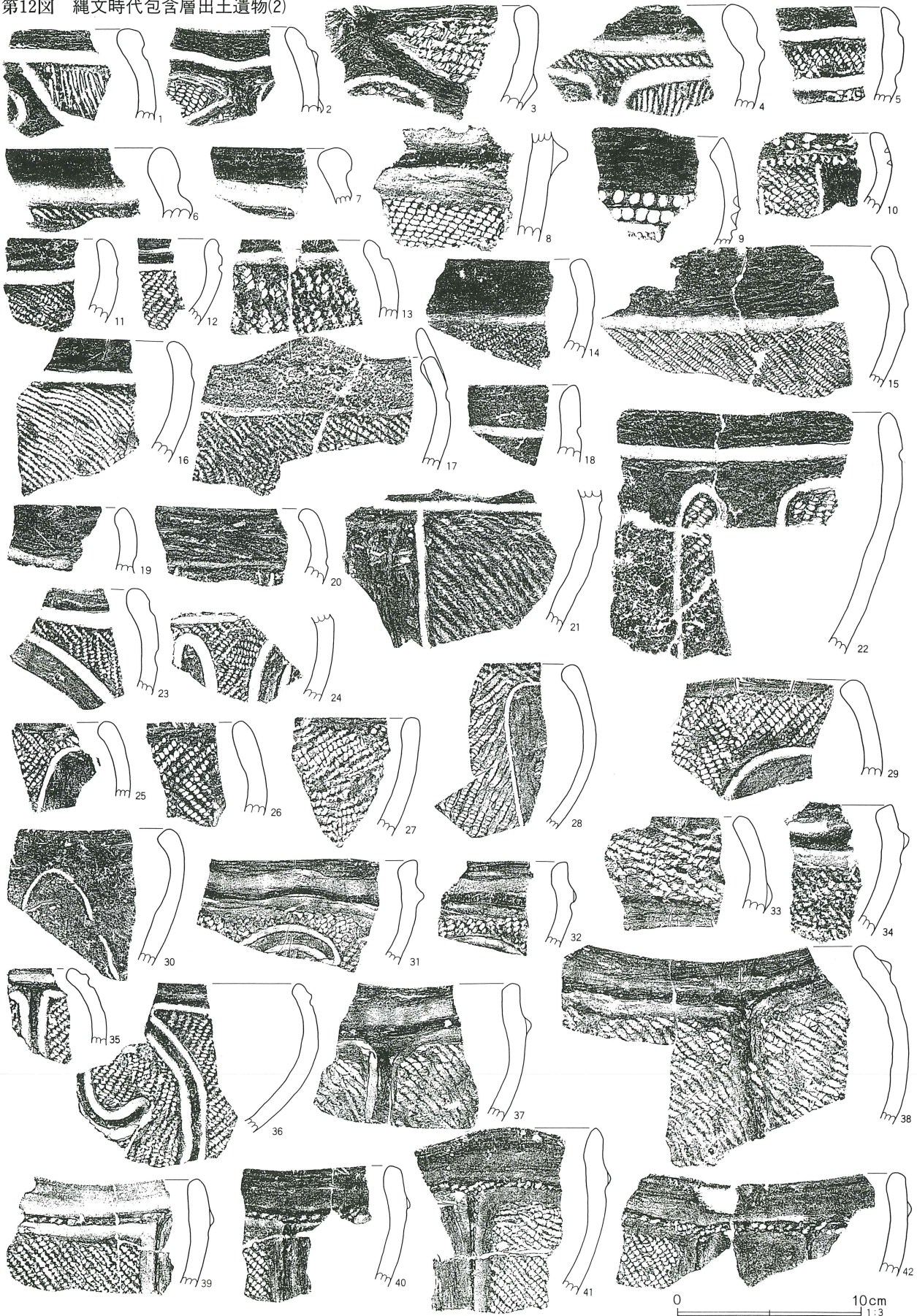
97、99はやや曲線的に条線を垂下させる土器の胴部破片である。

第11図 縄文時代包含層出土遺物(I)

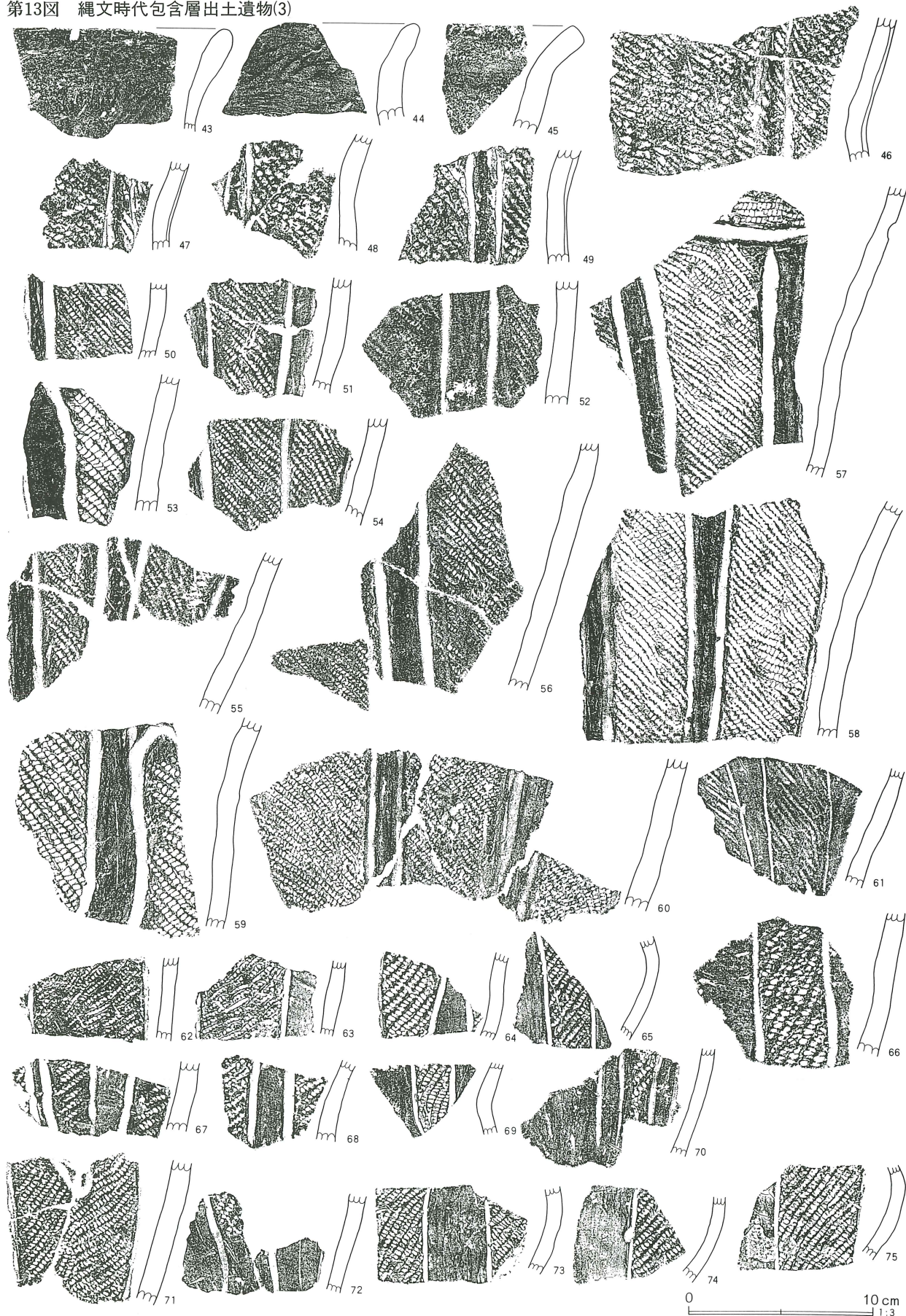


0 10 cm
1:4

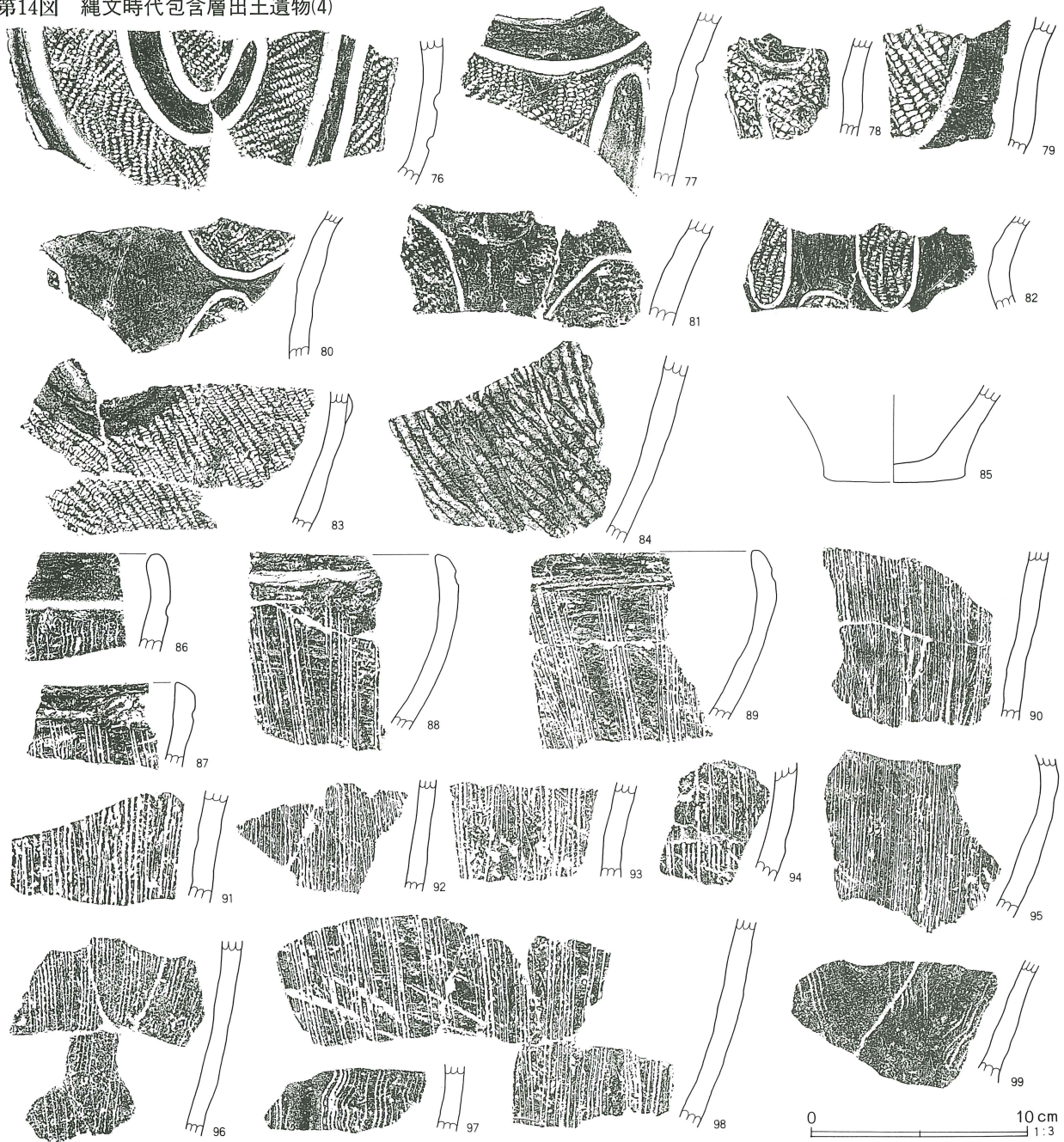
第12図 縄文時代包含層出土遺物(2)



第13図 縄文時代包含層出土遺物(3)



第14図 縄文時代包含層出土遺物(4)



(3) グリッド出土土器

調査区全般から、縄文時代中期、後期の土器が出土している。第15図、第16図に図示した。

1～79は中期、80～88は後期の土器である。

1、2は縄文時代中期前半の土器である。

1は括れ部付近の破片である。括れ部に沿って刻みを施す。2は方形の区画内に竹管文を施す。

3～79は縄文時代中期後半の土器である。加曾利EⅢ式が主体を占めている。

3～26はキャリパー形の深鉢形土器の口縁部破片である。

3は隆帯によって口縁部の区画文を施す。4は隆帯と沈線によって口縁部の楕円区画文を施す。単節RLの縄文を施す。5は口縁部に沈線による楕円区画と胴部に縦位沈線による磨消懸垂文を施す。単節LRの縄文を施す。6は隆帯と沈線により口縁部区画を施す。

7は沈線による口縁部楕円区画内に縦位の細沈線を施

す。8は波状の口縁部である。沈線による区画内に単節RLの縄文を施す。

9～24は口縁部が内湾して立ち上がる形態の深鉢形土器である。

9～11は沈線によって文様を施し、その周囲に縄文を施して磨消縄文とする土器である。口縁部に横線を施さない構成の土器である。9、11は単節LR、10は単節RLの縄文を施す。

12～19は口縁部に1条の横線が巡り、横線から上を無文部とする構成の土器である。12、14、15は横線下に単節RLの縄文を施す。18、19は曲線的な文様が認められる。18は単節RL、19は単節LRの縄文を横位、斜位に施す。

20～24は円形の刺突文が口縁部に巡る土器である。20は沈線と刺突が巡る。21は2段に刺突が巡る。22は刺突の下位に横線を施す。単節RLの縄文を施す。23、24は円形の刺突文を2段に施し、体部に曲線的な文様を施して、文様の周囲に縄文を施し磨消縄文とする構成の土器である。23、24は単節LRの縄文を各種の方向に施す。

25はキャリパー形深鉢形土器の口辺部の破片である。渦巻状の隆帯を施す。

26は口縁部が強く内湾する形態の深鉢形土器である。体部に2条の隆帯によって曲線的なモチーフを施す。

27は体部から口縁部へ丸みを帯びて立ち上がる形態の鉢形土器である。無文である。

28は口縁部が外傾気味に立ち上がる形態の土器である。両耳壺の口縁部であろう。

29は体部が丸みを帯び、括れ部を有する鉢形土器である。隆帯を施す。

30～78は深鉢形土器の胴部破片である。

30～64は縦位の沈線が認められる磨消縄文を施した胴部の破片である。全体の文様は不明なものが多いが、縦位の沈線間に縄文を施したキャリパー形深鉢形土器胴部の磨消懸垂文、横線下に磨消懸垂文を施す文様、U字状、逆U字状の沈線内に縄文を施す文様など

が主体を占めるものと思われる。

30～33は無節L、34、35、37～48は単節RL、36は複節RLR、49～51、53～64は単節LR、52は複節LRの縄文を縦位に施す。65、66は曲線的な文様が認められる破片である。65は緩く括れる形態の土器である。曲線的な2条の沈線間を磨消部とし、周辺に単節LRの縄文を各種の方向から施す。66は沈線による文様内部に単節LRの縄文を縦位に施す。

67～70は隆帯を施す土器である。

67は無節Lの縄文を斜位に施す。68は隆帯によって曲線的な文様を施す土器である。隆帯間に無節Lの縄文を施す。69、70は縦位に隆帯が垂下する。70は単節RLの縄文を施す。

71～78は条線を施す深鉢形土器の胴部破片である。

71は縦位の条線と刺突を施した隆帯が垂下する。曾利系の土器である。72～74は縦位の条線を施す。72、73は横線を施す。口縁部を無文とし、横線下に条線を施す土器であろう。75～78は縦位、斜位に条線を施す。77、78はやや粗い条線を施す。

79は深鉢形土器の底部である。

80～88は縄文時代後期前葉の土器である。いずれも堀之内式である。

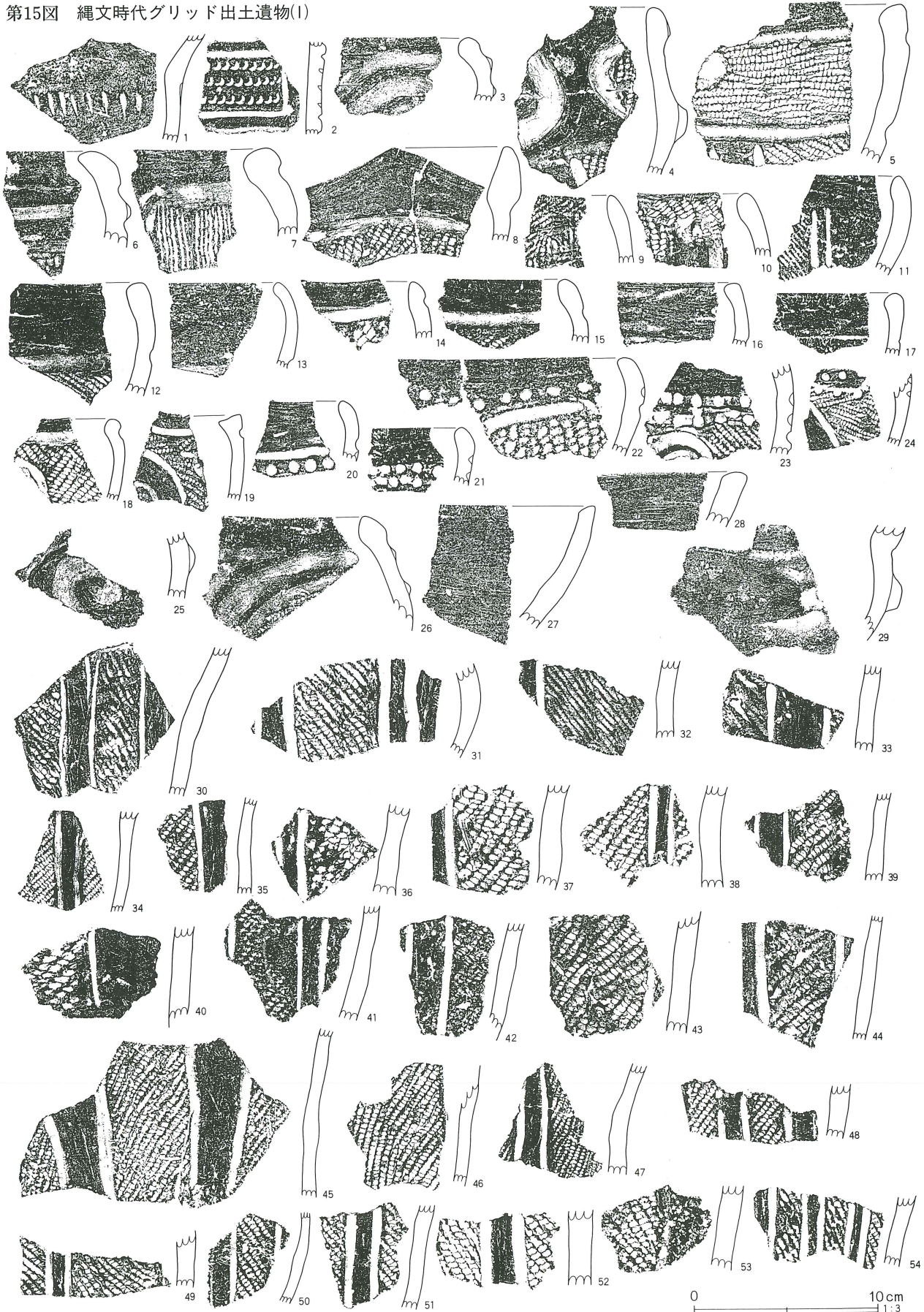
80～86は深鉢形土器である。

80は口縁部が外反気味に立ち上がる形態の土器である。口縁部に1条の沈線を施す。81は胴部が緩く括れる形態である。口縁部に円形の刺突が巡り、体部に斜沈線を施す。82、83は器面全体に縄文を施す。直線的に立ち上がる形態の土器である。単節LRの縄文を横位、斜位に施す。84は胴部が緩く括れる形態である。斜沈線を施す。85、86はいわゆる朝顔形の形態の土器である。横位の隆帯、8の字状貼付文、横位に展開する充填縄文の文様を施す。単節LRの縄文を施す。

87は算盤玉形の形態の注口土器である。把手部の破片である。渦巻状の沈線、刺突等を施す。

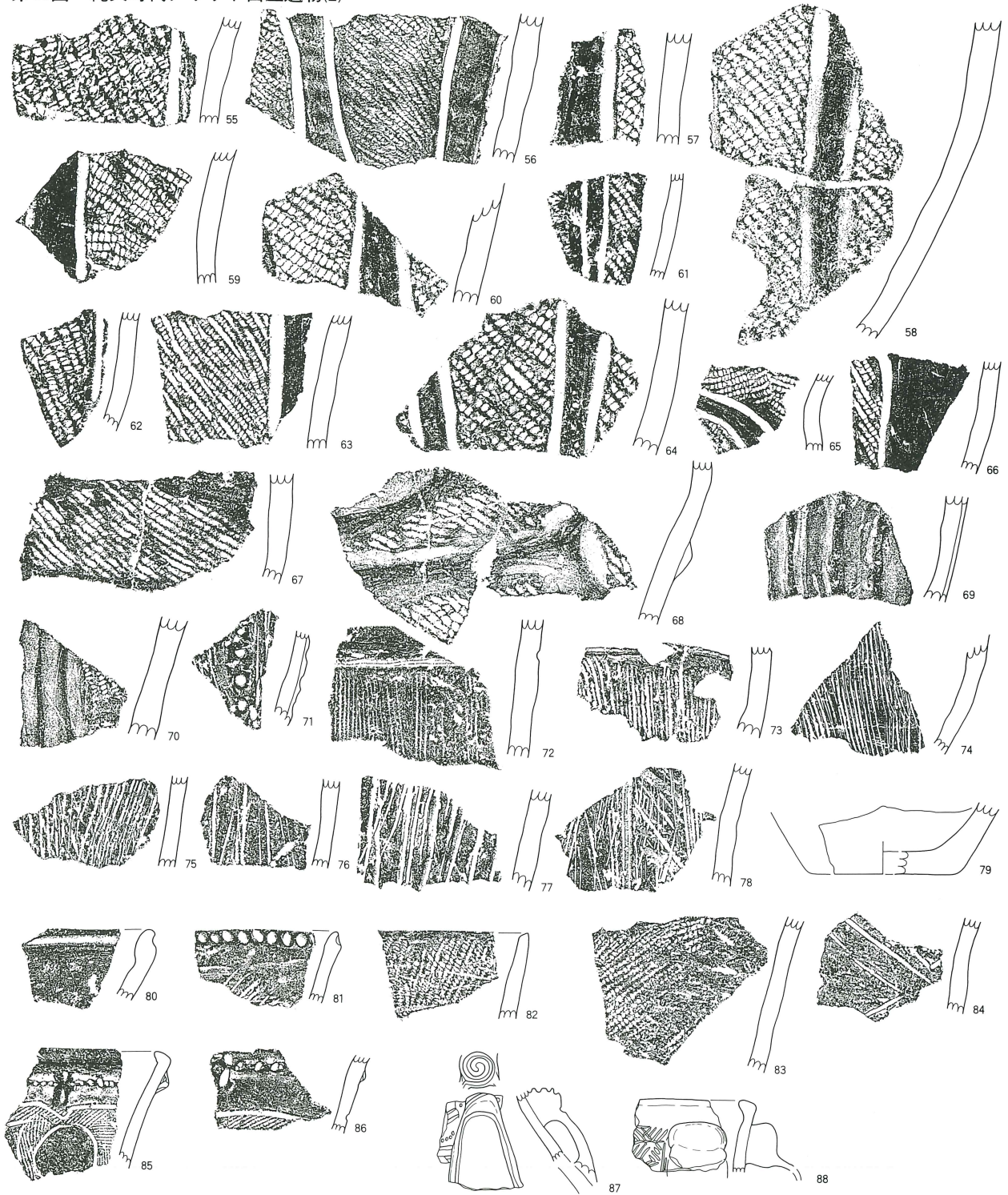
88は外反気味に立ち上がる形態の土器である。把手部と思われる肉厚な貼付を施す。短沈線を鋸歯状に施す。注口土器であろう。

第15図 縄文時代グリッド出土遺物(I)



0 10 cm
1:3

第16図 縄文時代グリッド出土遺物(2)



0 10 cm
1:3

(4) 旧石器時代および縄文時代の石器

縄文時代の遺物包含層から出土した石器以外は、古墳時代、中・近世の遺構中に混在していたものや遺構外からの出土である。

1～3はナイフ形石器である。

1は先端と基部を欠損する。右側縁方向から剥離した横長の剥片を素材とする。基部は両側縁からの調整により残存する部位では側縁がほぼ並行している。左刃である。残存する長さは3.95cmである。幅1.85cm、厚さ0.9cm、重量3.7g。石材は黒耀石である。切出形石器である。時期は岩宿II期と考えられる。第11号古墳跡周溝覆土から出土した。

2は基部を欠損している。基部方向から剥離した縦長の剥片を素材とする。残存する長さは2.85cmである。幅1.8cm、厚さ0.7cm、重量1.8g。石材は黒耀石である。切出形石器である。時期は岩宿II期と考えられる。第5号溝跡の覆土中から出土した。

3は上半部を欠損している。先端方向から剥離した縦長の剥片を素材とする。基部は両側縁からの丁寧な調整により左右対称形をしている。縦長の残存する長さは2.0cm、幅1.7cmである。厚さ0.55cm、重量1.3g。石材は黒耀石である。3は基部のみの破片で時期決定は難しいが1、2と大差はないと思われる。第8号住居跡の覆土中から出土した。

4は有茎尖頭器である。左右両側縁は細かい調整によって、鋸歯状に仕上げられている。基部は左右対称を欠いている。先端を欠損する。残存する長さは5.8cmである。幅1.3cm、厚さ0.4cm、重量3.09g。石材はチャートである。第4号古墳跡周溝覆土から出土した。縄文時代草創期の所産であろう。

5～10は石鏃。いずれも遺構外等の出土である。

5は二等辺三角形の形状で基部に緩い抉りが入っている。先端を欠く。残存する長さは2.1cmである。幅1.2cm、厚さ0.45cm、重量0.97g。石材はチャートである。

6は不整の三角形をしている。先端を欠く。残存する長さは1.7cmである。幅1.5cm、厚さ0.35cm、重量0.71

g。石材はチャートである。

7は基部に抉りが入っている。基部の一部を欠く。残存する長さは2.3cmである。厚さ0.3cm、重量0.70g。石材はチャートである。

8は基部に抉りが入っている。先端を欠く。残存する長さは1.3cmである。幅1.35cm、厚さ0.4cm、重量0.70g。石材はチャートである。

9は基部に抉りが入っている。先端を欠く。残存する長さは2.0cmである。幅1.7cm、厚さ0.35cm、重量1.04g。石材はチャートである。

10は基部に抉りが入っている。先端と基部の一部を欠く。残存する長さは2.2cmである。厚さ0.4cm、重量1.29g。石材はチャートである。

11、12は磨製石斧である。

11は完形品である。両側縁と基部は研磨されて面をなしている。刃部は円刃である。長さ10.0cm、幅5.9cm、厚さ2.2cm、重量236.6g。石材は凝灰岩である。包含層から出土した(第9図)。

12は下半を欠損する。両側縁と基部は研磨されて面をなしている。調整の剥離の痕跡を一部に残す。残存する長さは7.0cm、幅は4.7cmである。厚さ2.6cm、重量130.3g。石材は凝灰岩である。第5号溝覆土中から出土した。

13は打製石斧である。欠損し刃部周辺のみが残存する。残存する長さは4.4cm、幅は6.7cmである。厚さ1.5cm、重量56.2g。石材はホルンフェルスである。F3グリッドから出土した。

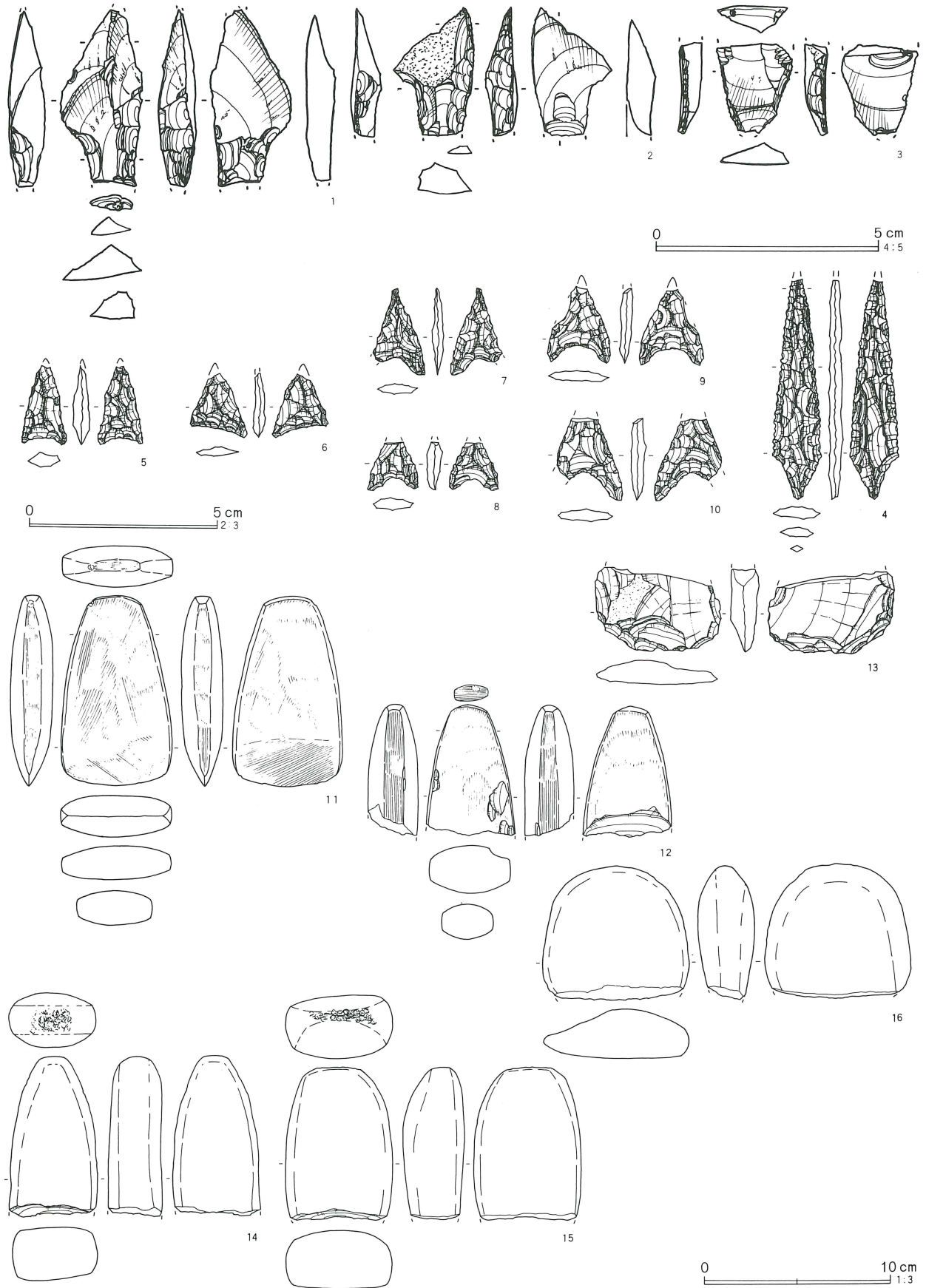
14～16は磨石である。包含層からの出土である(第9図)。いずれも一部欠損している。

14は残存する長さ8.5cm、幅4.7cmである。厚さ3.0cm、重量215.2g。石材は閃緑岩である。磨製石斧の可能性も皆無ではない。

15は残存する長さ8.1cm、幅5.7cmである。厚さ3.3cm、重量222.0g。石材は砂岩である。

16は残存する長さ7.1cm、幅7.8cmである。厚さ3.0cm、重量257.7g。石材は安山岩である。

第17図 旧石器時代および縄文時代の石器



2. 古墳時代

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (第18・19図)

H4グリッドで検出した。北西角が第2号古墳跡と重複関係にあり、覆土の平面確認で、当住居跡が第2号古墳跡に先行すると判断できた。平面形は正方形であった。規模は長辺3.95m、短辺3.76m、深さ0.14m、長軸方位はN-84°-Eであった。

覆土上層は現代建築物の攪乱によって削平されており、床面付近で検出した。東部では床面が攪乱層下に露出していた。遺存していた覆土中には、少量の炭化物・焼土が認められた。

壁面はほぼ直立していた。壁溝が全周しており、覆土がローム主体であったことから、壁材の埋設土もしくは、壁材の抜き取り後に、壁面が崩落した層であると推測できる。

炉跡は南西に寄って設けられていた。平面形はやや歪んだ円形で、径70cmであった。上部に青灰色粘土で「火皿」を設けていた。火床面は非常によく焼けていた。青灰色粘土下層の10層は被熱しておらず、さらに下層にはローム層が被熱した11層が認められた。被熱範囲を一旦ロームで埋め戻してから、炉底面となる粘土層を「火皿」として設けたものであるが、劣化にともない、上層粘土を貼り替えたと推定できる。構築時の掘り込みは12cm程度であった。

貯蔵穴は南東角に掘り込まれていた。長方形に近い楕円形で長辺103cm、短辺70cm、深さ40cm程度であった。底面は平坦で、黒褐色のシルト層を敷いたものと

思われ、堅く締まっていた。壁面は一旦垂直に立ち上がった後、住居跡中央部側に平坦面を作りだしていた。出土遺物は覆土中より少量の甕・壺片が得られている。

貯蔵穴脇には、深さ径35cm程度の隅丸方形の柱穴1本が掘り込まれていた。7層は柱痕跡と思われるが、腐食土等は確認できなかった。抜き取り痕跡はなかった。なお、他に柱穴は検出できず、上屋の構造は不明である。

床面は南半部、特に貯蔵穴と炉跡間を中心に顕著に硬化していた。凹凸と光沢があり、マンガン斑が凝着していた。掘り方は床面周囲を一段深く掘り下げている。貼床層は非常にしまった粘性の高い土壤で、ロームブロックを多量に含んでいた。整地層上層の2cm程度が硬化していた。

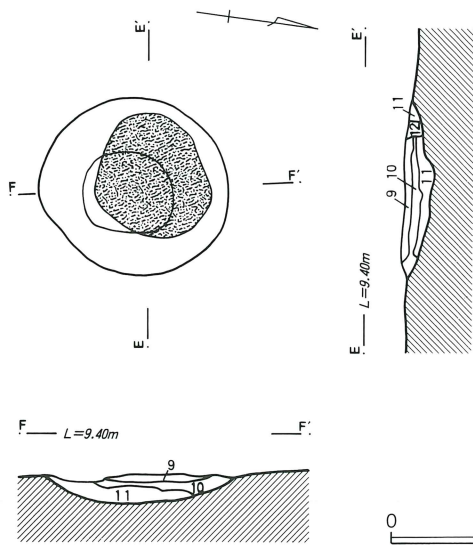
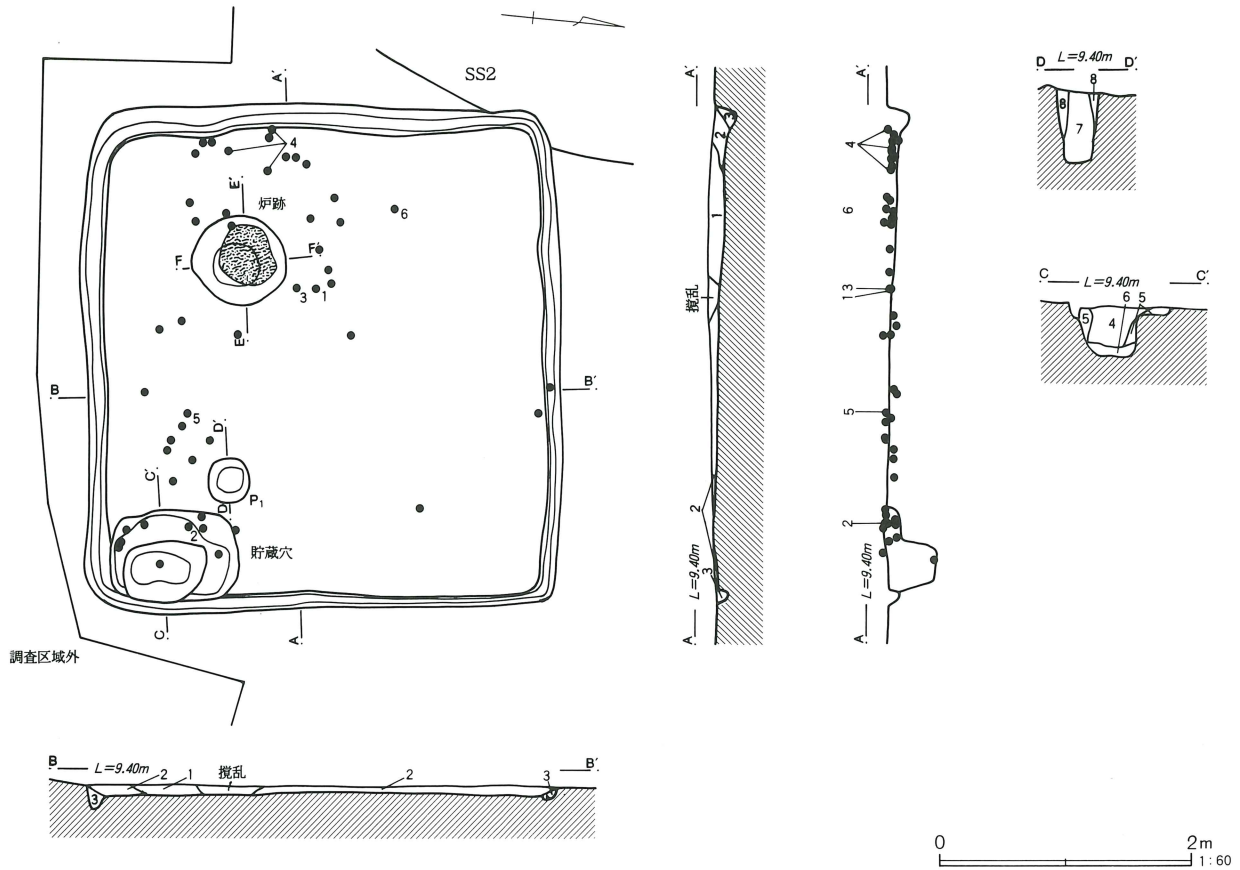
出土遺物は、炉跡・貯蔵穴周辺を中心として、床面付近の覆土内に包含されていた。出土した土器片はいずれも古墳時代前期の土師器片であり、完形の遺物は認められなかった。1は台付甕と考えられる。口縁部は屈曲の弱い受け口状で器壁が非常に薄い。一方で、体部のハケ調整に在地的特徴がみられる。2は複合口縁の壺口縁部で、貯蔵穴覆土上層から出土した。5は鉢もしくは椀である。7は複合口縁壺の口縁部であるが、焼成前に小孔が穿孔されていた。他に覆土中から、6に示した桃の核1点が得られた。

図示したもの以外には、台付甕2個体、複合口縁壺1個体の破片が出土した。

第1号竪穴住居跡出土遺物観察表 (第19図)

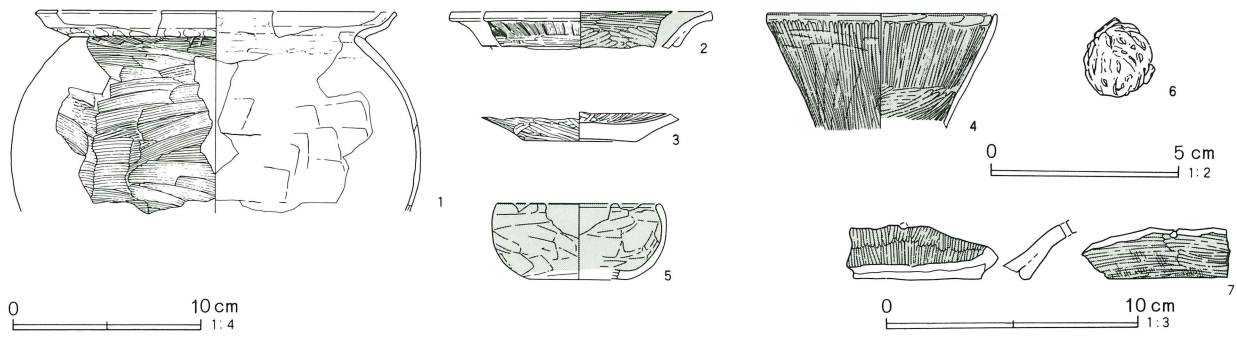
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(19.4)			AGH	A	暗褐	15	外;ハケ 内;ヘラナデ 頸部継ぎ目内部にハケ
2	壺	(14.0)			ADGH	A	橙	15	外;ハケ後粗ミガキ 内;ミガキ・赤彩
3	底部			5.9	ADGH	A	にぶい褐	85	内外;ミガキ 二次被熱でやや赤化
4	壺	12.2			AGH	A	明黄褐	80	外;ハケ後ミガキ・赤彩 内;ミガキ・赤彩
5	鉢	(8.4)	4.0	(5.1)	ADG	A	にぶい橙	20	外;ヘラナデ or ヘラケズリ・赤彩 (底部除く) 内;ヘラナデ・赤彩 (底部除く)
6	桃の核	長2.1							炭化
7	壺				ADGH	A	にぶい橙		外;ハケ後ミガキ・赤彩 内;ミガキ・赤彩 焼成前穿孔

第18図 第1号竪穴住居跡



- 1 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少、炭化物少
- 2 暗褐色土 ローム粒多、1層に似る
- 3 暗黄褐色土 ローム粒主体
- 4 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少、炭化物少
- 5 暗褐色土 ローム粒多
- 6 黒褐色土 ローム粒少 堅緻にしまる
- 7 暗黄褐色土 ローム粒多
- 8 黄褐色土 ローム主体
- 9 赤灰色粘土 焼けてブロック状
- 10 青灰色粘土 焼土粒少
- 11 明赤褐色土 ロームが焼けてブロック状となる
- 12 暗褐色土 ローム粒少、焼土粒少

第19図 第1号竪穴住居跡出土遺物



第2号竪穴住居跡 (第20図)

H 6グリッドで検出した。第3号古墳跡と重複関係にあり、覆土の平面確認で、当住居跡は第3号古墳跡に先行すると判断できた。北東部角は第3号古墳跡周溝によって破壊されていた。平面形は長方形であった。規模は長辺4.94m、短辺3.78m、深さ0.06m、長軸方位はN-81°-Eであった。

上部は現代建築物の攪乱によって削平されており、床面上面に攪乱が達した状態で検出した。南西部では貼床材が失われていた。覆土は壁溝部分に限って遺存しており、少量の炭化物・焼土、多量のロームからなっていた。壁材の埋設土もしくは、壁材の抜き取り後、壁面が崩落したものと考えられる。壁溝は本来全周していたものと考えられるが、攪乱による破壊で北西角付近が失われていた。

柱穴は2本で、住居跡長軸上に検出した。柱間は約220cm、P 1が径30cm、深さ64cm、P 2が長径30cm、短径24cm、深さ66cmであった。覆土は1層からなり柱痕跡と思われるが、腐食土等は確認できなかった。抜き取り痕跡はなかった。

炉跡は、柱穴間の北西壁よりに設置されていた。平面形は西側で直線となる不正な円形で、径約65cm、深さ15cm程度に、地山ローム層を掘り下げていた。底面はすり鉢状で、被熱範囲になる下層をロームで埋め戻してから、上部に粘土を用いて「火皿」を設けていた。「火皿」を構成する粘土は焼土化しており、激しい風化または長期間にわたる使用を受け、ブロック状となり、損傷していた。

ブロック状となった「火皿」粘土材間に落ち込んだ覆土中からは、少量の土器片が得られた。また、炉跡脇には、焼土と炭化材・炭化物の分布範囲が検出できた。

貯蔵穴は南東角付近の壁際に掘り込まれていた。ほぼ正方形平面で、長辺100cm、短辺88cm、深さ22cmであった。底面は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がっていた。住居跡中央部側には、平坦面をともなっていた。内部からは炭化した丸木材4本以上が出土した。短辺にあたる東西方向に並び、蓋状の用途を果たしていた可能性が高い。内部から少量の土器片を得たが、図示できるものはなかった。

床面は貼床材遺存部分に限り、全体に硬化していた。貯蔵穴・炉跡間は顕著で、凹凸と光沢が認められた。掘り方は床面ほぼ全面を掘り下げていた。貼床層は非常にしまった粘性の高い土壌で、ロームブロックは多くなかった。上層の2cm程度が硬化したもので、マンガン斑が凝着していた。

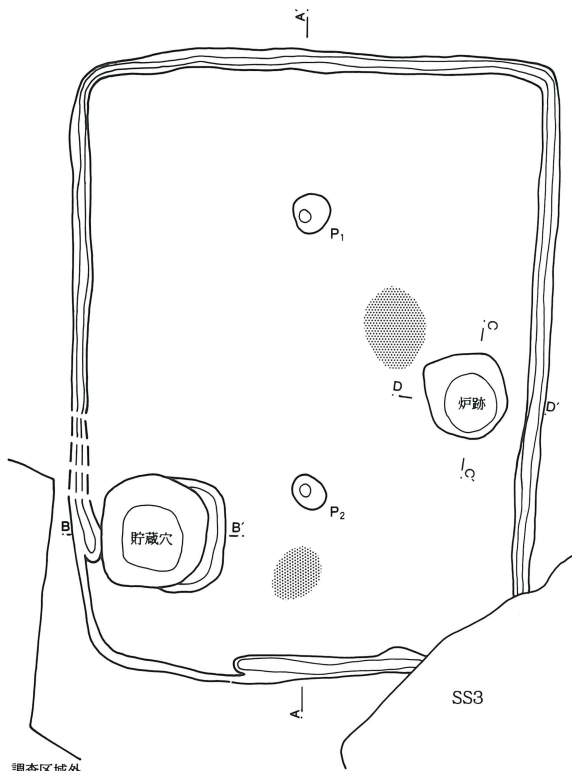
出土遺物は床面直上および貼床層内から、少量の古墳時代前期に属する土師器甕・壺片を検出したが、図示できるものはなかった。

第3号竪穴住居跡 (第21図)

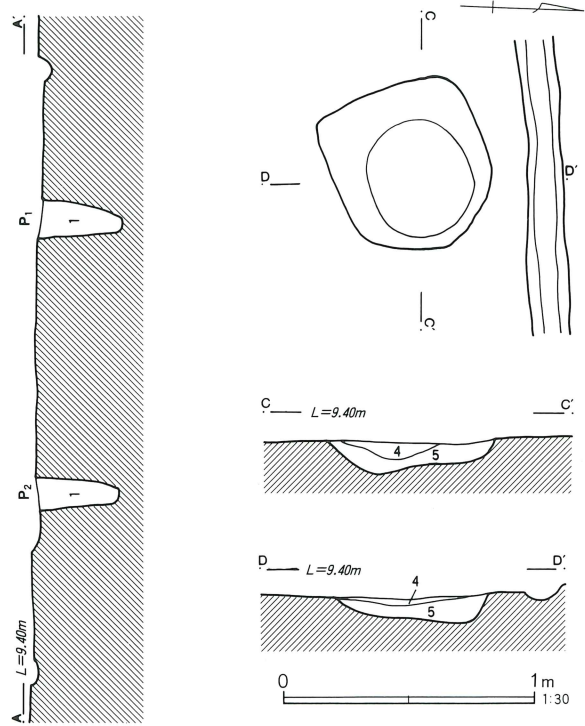
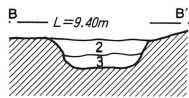
H 5グリッドで検出した。平面形は、ほぼ方形であった。規模は長辺3.60m、短辺3.50m、長軸方位はN-58°-Eであった。

貼床層まで現代建築物の攪乱によって削平されており、壁溝によって形状を把握した。

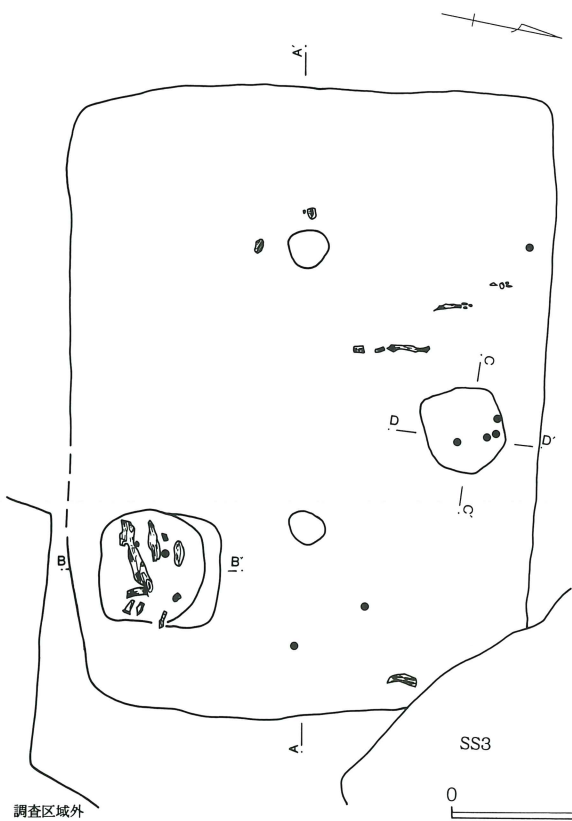
第20図 第2号竖穴住居跡



調査区域外



- 1 暗褐色土 ローム粒多、焼土粒少、炭化物少
- 2 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒少、焼土粒少、炭化物少
- 3 暗黄褐色土 ローム粒多、焼土粒少、炭化物少
- 4 暗褐色土 焼土ブロック・焼土粒少、炭化物少
- 5 暗黄褐色土 ローム粒多



調査区域外

中央部以外では貼床材が失われていた。

覆土は壁溝部分に限って遺存しており、少量の炭化物・焼土を含む黒褐色土に少量のロームブロックが混入していた。壁材の腐食層に埋設土が混合したものと考えられる。

壁溝は本来全周していたものと考えられるが、攪乱による破壊で西辺中央部が失われていた。

検出できた柱穴は3本であったが、炉跡周辺に未検出の柱穴の存在を推測してもよいだろう。柱間はP1～P2が約220cm、P2～P3が約130cmであった。P1が長径24cm、短径20cm、深さ8cm、P2が長径28cm、短径20cm、深さ10cm、P3が長径26cm、短径20cm、深さ16cmであった。

覆土はいずれも黒褐色のシルト層で、柱材の抜き取り痕はみられなかった。

覆土の暗色は、柱材の腐食による有機物に由来すると考えられる。

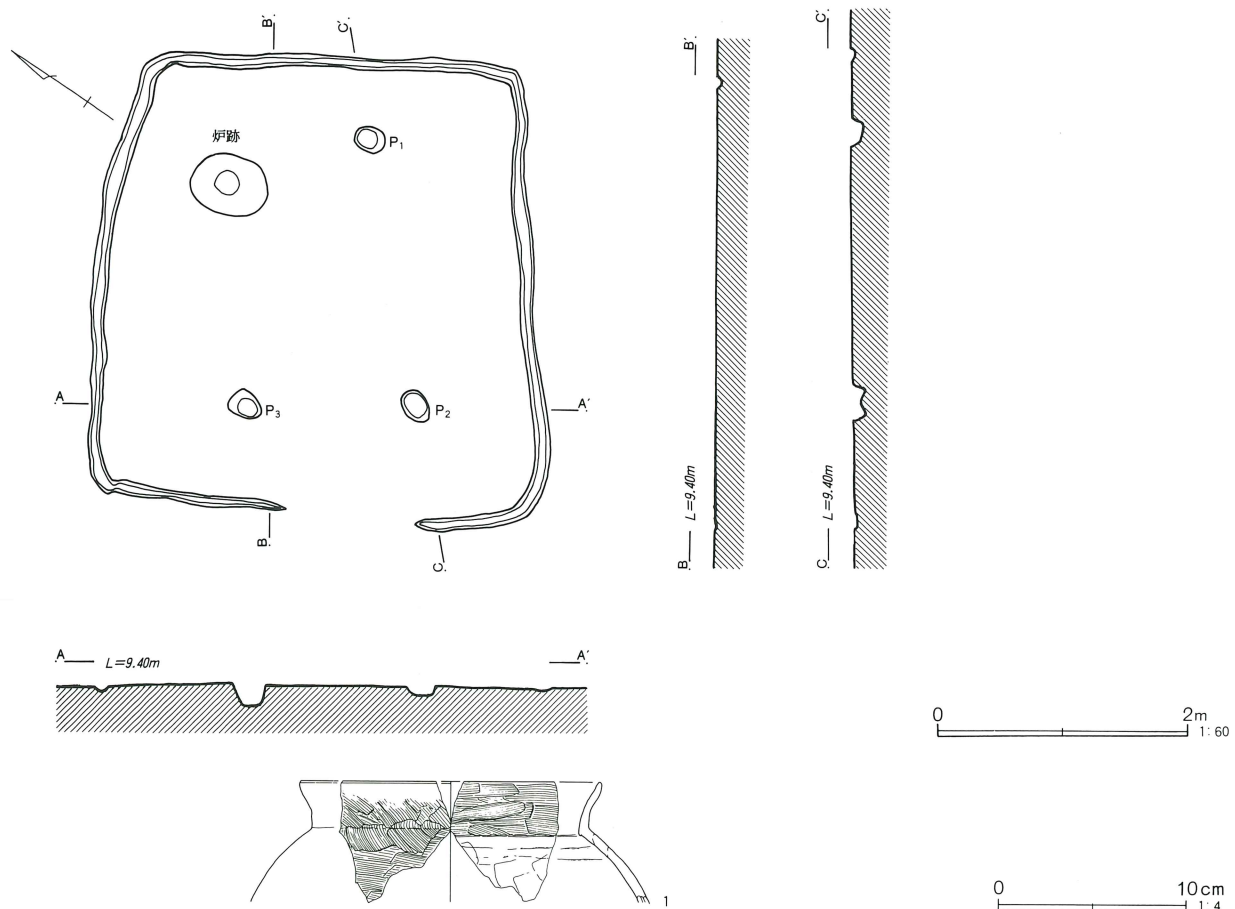
炉跡は北側隅に寄った部分に設置されていた。平面形は楕円形で、長径62cm、短径48cm、深さ5cm程度に地山をすり鉢状に掘り下げ、粘土による「火皿」を設置したものであった。「火皿」上部の焼土化部分は削平されていた。検出できたのは粘土層下層の被熱していない部分である。

床面は貼床材の遺存状況から、柱穴で囲まれた範囲を中心によく硬化していたことがわかった。一部貼床上面が遺存した部分には、凹凸と光沢が認められた。

第3号竪穴住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(16.0)			ADG	A	にぶい黄褐	15	内外；ハケ

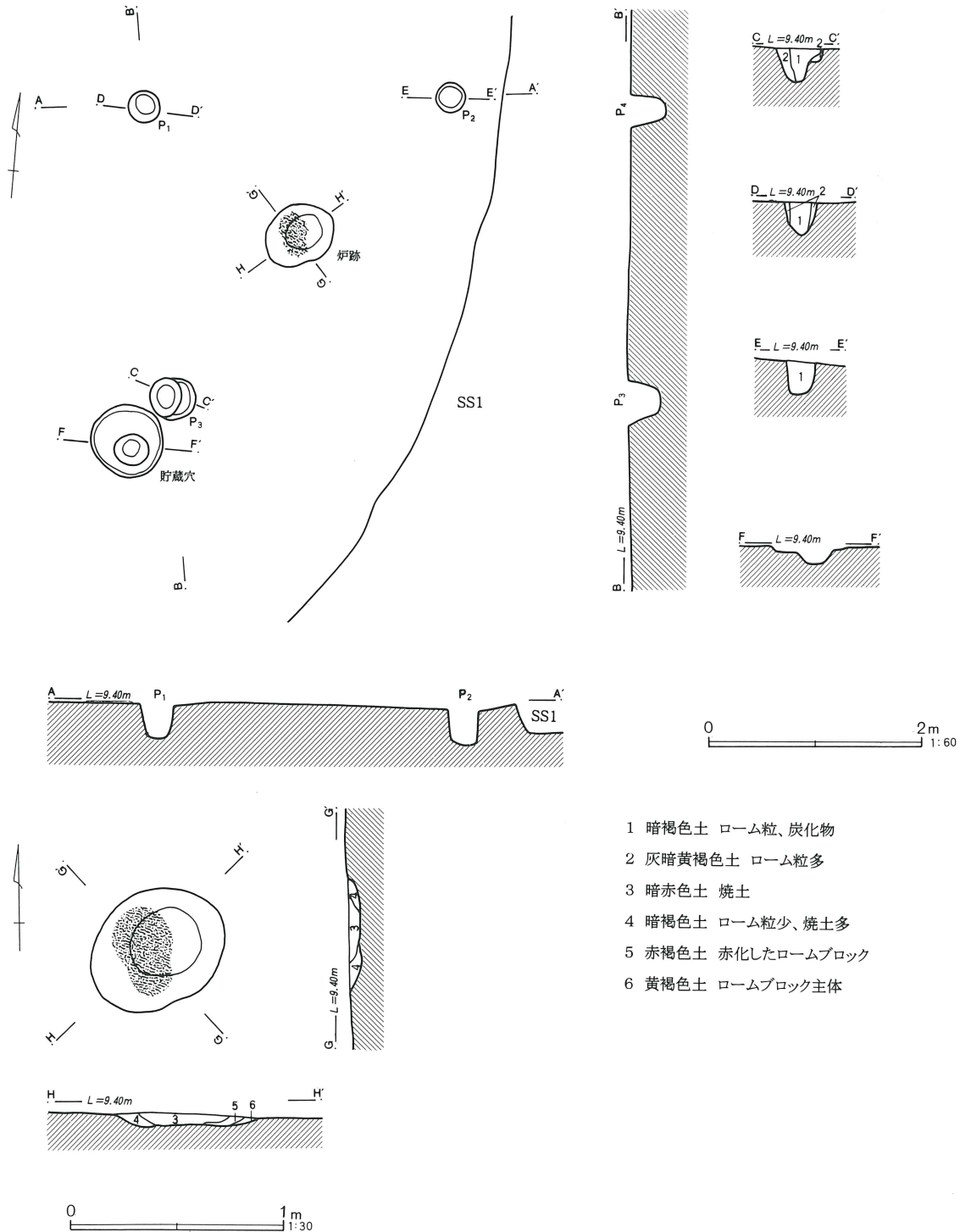
第21図 第3号竪穴住居跡および出土遺物



掘り方は床面周囲を一段深く掘り下げていた。貼床層はロームブロックを主体とし、シルトブロックが混合されていた。

出土遺物は貼床層上面の攪乱土中から、土師器片2片を得た。図示したもの以外の、台付甕片である。

第22図 第4号竪穴住居跡



断できた。南東部の柱穴が周溝によって破壊されていた。

貼床層まで現代建築物の攪乱によって削平されており、3本の柱穴と炉跡および貯蔵穴の存在によって検出した。貼床材は完全に失われていた。覆土はなかった。

柱穴は3本検出できた。P1が径30cm、深さ30cm、P2が径28cm、深さ32cm、P3が長径44cm、短径40cm、深さ30cmであった。覆土はいずれも黒褐色のシルト層で、柱材の抜き取り痕はみられなかった。覆土の暗色は、柱材の腐食による有機物に由来すると考えられる。

炉跡は柱穴に囲まれた範囲の中央に設置されていた。不整な楕円形平面で、長径68cm、短径56cm、深さ5cm程度に地山ローム層を掘り窪めていた。底面は非常によく焼けており、風化・劣化のためブロック状となっていた。

貯蔵穴と思われる施設は、南西部P3脇で検出した。楕円形平面で、深さ10cm程度、長径70cm、短径64cm

であった。底面中央南寄りに、径30cm、深さ18cmのピット状の掘り込みがあった。壁面は傾斜しており、底面は平坦であった。出土遺物はなかった。

床面は攪乱のため削平されており、貼床・掘り方については明らかにできなかった。

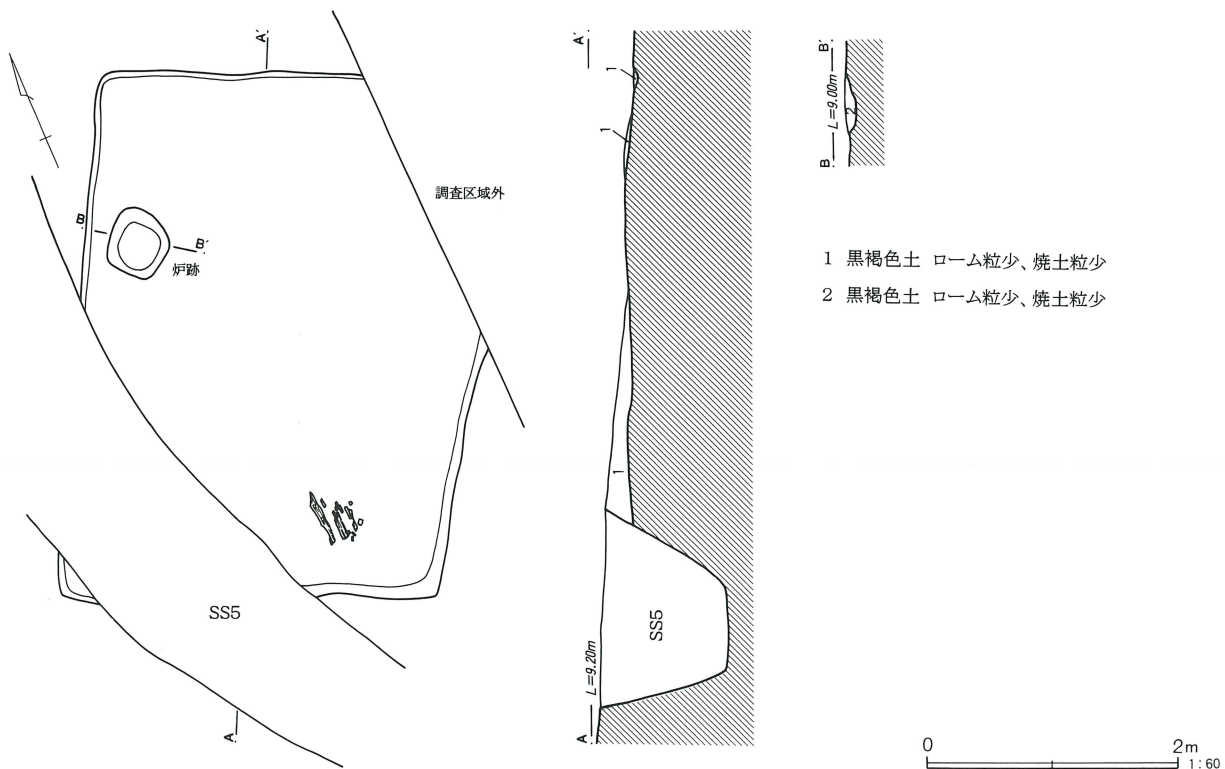
出土遺物は検出できなかった。

第5号竪穴住居跡 (第23図)

C6・D6グリッドで検出した。第5号古墳跡と重複関係にあり、覆土の平面確認によって、当住居跡が第5号古墳跡に先行すると判断できた。南西部は第5号古墳跡周溝が貫通し破壊されていた。北東角は調査範囲外で調査できなかった。平面形は長方形で、規模は長辺4.10m、短辺3.20m、深さ0.20m、長軸方位はN-29°-Eであった。

一部では、貼床層まで現代建築物の攪乱によって削平されていた。覆土は南半部に遺存しており、少量の焼土を含む黒褐色土に少量のロームブロックが混入していた。壁溝は検出できなかった。

第23図 第5号竪穴住居跡



壁面はほぼ直立していた。

炉跡は、西側長辺壁際やや北側に寄った位置に設置されていた。平面形はやや歪んだ方形で、一辺45～50cm、深さ10cm程度に、地山ローム層を掘り窪めていた。底面は非常によく焼けており、硬化したロームの焼土ブロックとなっていた。

床面は炉跡付近を中心に中央部でやや硬化していたが、凹凸と光沢は顕著ではなかった。掘り方は床面中央部を掘り下げていた。貼床層はシルトを主材とし、ロームブロックを混合していた。

出土遺物は覆土1層中から古墳時代前期に属する土師器甕片10点を得たが、図示できるものはなかった。また、南東部覆土中から平行する3本の炭化材を検出した。径4cm程度で住居跡上屋材の一部と考えられる。

第6号竪穴住居跡（第24・25図）

C5グリッドで検出した。第4号溝跡と重複関係にあり、覆土の平面確認によって、当住居跡が第4号溝跡に先行すると判断できた。第4号溝跡の掘り込みが浅く、当住居跡は西側壁面の一部を削り取られた以外、破壊されていなかった。平面形はほぼ正方形であった。規模は一辺3.80m、深さ0.30m、南北の軸方位はN-23°-Wであった。

覆土は上部を現代の攪乱によって削平されていたが、南部では40cm程度の堆積が遺存していた。覆土中には、少量の炭化物・焼土が混入していた。

壁面はほぼ直立していた。壁溝は部分的に途切れる

ものの、基本的に全周していたと思われる。壁溝内の覆土はローム主体で、壁材の埋設土、もしくは壁材の抜き取り後に壁面が崩落したものと推測できる。

炉跡は南東部に寄って設置されていた。平面形は隅丸長方形で、長辺60cm、短辺46cm、深さ6cm程度で、地山ローム層を掘り窪めていた。底面は非常によく焼けており、焼土化したロームがブロック状となっていた。

貯蔵穴は南西角に掘り込まれていた。平面形は、ほぼ円形で径50cm、深さ40cmであった。底面は平坦で、壁面は急に立ち上がっていた。内部からは少量の土器片を得たが、図示できるものはなかった。

床面は炉跡および中央部を中心に顕著に硬化していた。炉跡周辺では若干の盛り上がりがあり、凹凸と光沢が認められた。掘り方は床面周囲を一段深く掘り下げていた。貼床層はロームブロックとシルトブロックの混合土であった。

出土遺物は、覆土4層中から古墳時代前期に属する土師器片を少量検出した。貯蔵穴周囲の壁際では、第25図1に示したほぼ完形の台付甕・甑（同3）・高杯脚部（同4）が床面付近でみつがっている。1の台付甕は覆土中の破片とも接合関係があったが、竪穴部の埋没以前に床面に置かれたものと考えてよいだろう。ただし、生活段階にともなうと断定できる材料は得られなかった。覆土中の遺物には、台付甕片、複合口縁壺片、輪積痕をのこす甕（第25図2）、網目状捺糸文を施した壺形土器片（第25図5）などがあった。

第6号竪穴住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕	15.5	20.3	7.8	ADGH	A	にぶい褐	90	外；ハケ後板ナデ 内；板ナデ
2	甕	(22.9)			AGH	A	黒褐	20	外；ハケ後指ナデ 内；ヘラナデ
3	甑	20.1	7.7	2.3	ADGH	A	にぶい橙	60	外；口縁板ナデ・体部ハケ後板ナデ 内；板ナデ
4	高杯			15.8	ADGH	A	暗赤褐	40	外；ミガキ・赤彩 内；ヘラナデ・赤彩（一部） 3孔 孔径1.5cm
5	壺				ADGH	A	にぶい橙		外；ミガキ・赤彩・網目状捺糸文(R) 内；ミガキ

第24図 第6号竖穴住居跡

